

---

**デュオソリスト・キス 仮面ライダーW(ダブル)外伝 仮面ライダーXX(ゼキス)**

鉄槻 緋色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デュオソリスト・キス 仮面ライダー<sup>ダブル</sup>W外伝 仮面ライダー<sup>ゼクス</sup>XX

### 【Nコード】

N0933I

### 【作者名】

鉄槻 緋色

### 【あらすじ】

この風の都にあつて、いつたい如何なる風に翻弄されたのか。運命を断絶された復讐のアネムリオンが慟哭と怨嗟の旋律を撒き散らす。それは一人で二人の復讐者。WとMのイニシャルが重なり<sup>キス</sup>Xを描く時、怒りの羽根車は全ての記憶を巻き込んで、砕き、碾き、塵芥に帰すだろう。たとえ風都の笑顔を穢すことになつても……裏切りの符丁はキスのサイン……

こちらは、鉄槻オリジナルキャラクターを主人公として本編キャストに加えた『仮面ライダー W』<sup>ダブル</sup>の外伝的ストーリーです。

時系列は本編における亜樹子嬢登場以前のため、亜樹子嬢がおりません。

また鉄槻は本来、原作の設定がほぼ全て確定した後でなければ外伝は書かない主義だったのですが、思い付いてしまったので、のちに設定が覆されることを前提として、これを「パイロット版」として発表致します。

この「パイロット版」は近日中に数回で終了する予定ですが、いずれ書かれる完全版では設定が変わってるかもしれませぬ。

それまでは、どうかこちらの「パイロット版」をお楽しみ下さい。

嫌な風の吹く夜だった。

その晩、妙な胸騒ぎを覚えた鷺生は粘つく夏の夜風が漂う表通りへと繰り出した。

白衣 鷺生。この「風都」生まれの風都育ち。二十年暮らしたこの風の都はもはや彼にとって庭も同然である。

だが彼にはその風都の風景が、ここ数ヶ月程その様相を変化させているように見える。

水無 真理亜。鷺生の想い人が姿を消してから。

ただの感傷かも知れない。

彼女を飲み込んでしまったかもしれない風都への八つ当たりかも知れない。

彼女の家族によって搜索願いは出されたが、経過は芳しくない。

鷺生もさんざん探し回った。

それでも見つからない苛立ちが見せた幻覚かも知れないが、それでも鷺生はこの「嫌な風」に言い知れぬ不安を感じ、街を歩き出した。

「……………」  
既に深夜零時を回り、いかな風之都とてそれなりに蒸し暑い夏の夜を好んで歩き回る者は少ない。

そんな無人の街の中で、遠くでゆったり回転する巨大な風都タワーの風車を始め、街中に飾られている大小様々な風車たちがカラカラと音を立てる様はまるで異世界の住人に囲まれたような違和感と心細さを覚えさせる。

「……………」  
僅かに身震いした鷺生は、だがまるでその風都の夜の住人達に誘われるかのように、一方へと歩き出した。

彼方から吹く風が、風車達と鷺生の髪をなぶり吹き抜けてゆく。その風の音に鷺生は直感した。この先に何かがある、と。

「真理亜……」

それは、当てずっぽうも甚だしい眩き。あまりにも脈絡なく口をついた想い人の名は、だが風都の風にわずかに混じった匂いを直感の奥の無意識が嗅ぎ当てたのか。

やがて街を駆ける鷺生の向かう先、この通りの向こうから、何者かの人影が姿を現した。

「……！」

おぼつかない足取り。暗闇と街灯の逆光に遮られ判然としないが、そのシルエットとわずかな動作が鷺生の記憶にあるものと一致した。

「真理亜！」

叫び、駆け出す。

程なく目前まで辿り着いたその人影は、近くの街灯の明かりの元に現れたその女性はやはり真理亜であった。

だが数ヶ月ぶりに見た真理亜は酷い有様だった。

美しかった長い黒髪は千々に乱れ、裾の長い病人着らしき着衣はボロボロに汚れ、顔に至るまで身体のおちこちに土が付いている。

まるで、たった今まで土の中にもいたかのように。

そしてその顔は、土と傷にまみれたその顔は生気を失い瞳の焦点はまるで合っていないかった。

「まりあ……真理亜……ツ！」

あまりの惨状に、再会の感動どころか言葉すら失っていた鷺生は、絶叫と共に想い人を抱き締めた。

その彼女の身体があまりにも冷たいことなど気にしていられない。

抱き締めた途端糸が切れたかのように崩折れた真理亜の身体。抱えながらもバランスを崩した鷺生は尻を突いたが、それでも必死に彼女を抱き留める。

「真理亜ツ！？ 真理亜ツ！ 真理亜……ツ！」

闇雲に彼女の名を叫び続ける。

腕の中の真理亜の顔は相変わらず生気がなく、聞こえているのかも分からない。

「……っ、そ、そっだ、救急車、」

慌てて尻ポケットから携帯電話を掴み出すが、なんと今の尻餅で圧壊し、ひび割れていて完全に壊れていた。

片手で無理矢理展開するが、使用不可能なのは明らかだ。

「……くっ、」

役に立たない携帯電話を放り棄て、鷺生は真理亜を抱き直した。

「待つてる真理亜！いま病院に……！」

「……わしゅう。」

体勢を立て直して片膝を突いたところで耳をくすぐった声音に、鷺生は動きを止めた。

「え……真理亜？」

「鷺生……」

見下ろした彼女の顔は、瞳は、弱々しく鷺生を見上げていた。

「真理亜！しっかりしろ！今、病院に連れて……」

「……！」

だが真理亜は、必死の励ましも聞かず、震える片手を鷺生の胸元に押しつけた。

「真理亜！？なに！？どうしたん……」

「これ、……を……」

ぶるぶると広げられてゆく五指の中から何かがこぼれ落ち、ばらばらと真理亜自身の胸に撒かれ、ある物は地面に落下した。

それは、綺麗に六角にカットされた細長い水晶の棒のように見えた。内部に複雑な電子部品を収め、端から端子を生やした色とりどりの鉱石の、棒。

「へ？なに？これ……」

「あな、たに……」

両手が塞がっている鷺生では取ることはできないが、真理亜はこれを鷺生に渡したいらしい。

震える真理亜の手は上げた状態のまま、何かを求め宙をさまよっている。考えるまでもない。鷺生の手を求めているのだ。

鷺生は慌てて座り込み、空いた手で真理亜の手を握り締めた。

「真理亜……！　なんで、なんでこんな……」

やがて、握られたことを察したのか、真理亜の手がしっかりと鷺生の手を握り返した。

「！？　真理亜！？」

「……………」

鷺生の目を見据えた瞳が、僅かに歪む唇が、鷺生になにかを訴える。

「なに！？　言っでごらん真理亜！」

真理亜の口元に耳を近付ける。

くぐもった喉の音の隙間に、真理亜はだが着実に言葉を紡いでゆく。お互いに必死の邂逅だった。何一つ取りこぼしてなるものか。ようやく逢えた彼女の気持ち、意志を受け止めんと、鷺生は耳をそばだてた。

「……………いつ、も……………いっしょ……………だ……………よ……………」

ひゅー……………」

あとは、呼気の抜ける音。

「……………！」

わなわなと震える首をねじ曲げて、泣きそつな顔を誤魔化しもせず、に真理亜の瞳を見つめる鷺生。

「……………真理亜。」

最期に。

真理亜はにこりと微笑むと。

がくりと脱力した真理亜の身体は末端からまるで塵か砂のように崩壊し鷺生の両腕から迅速に碎け流れ落ちてゆく。

「ああああああっ！？　まりあッ！？　真理亜！　真理亜ーッ

！

必死に宙を掻くが、そんなことでは崩落する砂を受け止められるはずもなく。

やがてそこに残るのは、座り込む鷺生と辺りに散らばる鉱石のような棒と、真理亜だった砂塵のみ。

「……………」  
「いや。」

いま開いた鷺生の手の中に、たったひとつだけ残されたものがあった。

「……………」  
「……………」

ゆっくりと広げられたその手の中には、地面に散らばった六個の鋳石の棒とはまた若干形状が違う小さい棒状が握られていた。

今にして思えばそれらはパソコンに使われるUSBメモリにそっくりであったが、それよりはやや大きめの、なだらかな曲線にデザインされ、中央に「両掌」と「ハートマーク」で意匠化された「M」の文様をあしらったピンクのメモリであった。

「なに……………」

涙でぐちゃぐちゃの顔で真理亜に託された謎のメモリを見下ろす。事情など知らない。

だが、ひとつだけ間違いなく確かなことがある。

最愛の真理亜は、こんなものの為に命を落としたこと。命を、落とさせられたであろうこと。

「……………」  
「なんだよ……………」  
「ふざけるなよ……………」  
「!?」

塵にまみれたMのメモリを握り締め、鷺生は理不尽を、困惑を、片端から怒りに塗り変えていった。

「誰だ!?」  
「どこのどいつだ!?」  
「……………」  
「絶対に見つけだしてやる!」  
「真理亜を死なせた報い、絶対にこの俺が受けさせる! 殺してやるぞ!」  
「うわあああああああああ!」

鷺生の怒りか、何者かの嘲笑か。絶叫と同時ひときわ強い風がうなりをあげ、風都タワーの羽根車をねじ切らんばかりに蹂躪した。

今から、一年ほど前のことである。

うらぶれた都会の狩人の罫ひくまにも、風都の風は分け隔てなく流れてゆく。

孤高の一匹狼とはいえ、自ら窓を閉めてまで孤独を気取りたい訳じゃない。

いかなる者が来ようとも去ろうとも、このタフガイの強靱な心は揺らぎやしないのは自明の理。

ただ、一陣の風がもたらす涼の恵みを、そつと静かに喫する心のゆとりくらいは持ち合わせているってことだ。

そう。だからこの事務所の開け放たれた窓は、いかなる風も拒みはしない孤高の一匹狼の度量の顕れ。

決して夏が暑いからとかそういうことじゃないんだってことだけは分かっておいて欲しい。

「お分かりかな？」

「はあ。」

怪訝顔の依頼者の男性の前で、この「鳴海探偵事務所」暫定所長・左ひだり・しょうたろう翔太郎が、指先で持ち上げた黒のハットの鏢の下、汗だくの顔でそつ締め括った。

部屋のすみに設えてある年代物の空調機は、「故障中」と書かれた紙を貼り付けて沈黙している。

「さて。」

どかりと所長椅子に沈み込んだ翔太郎は、机のクリップボードを取り上げて眇に眺めた。

「……「はくい・わしお」さんとおっしゃる……」

「「しらい」です。「しらい・わしゅう」。」

依頼者に書かせた依頼書を見つめたまま、しばし気まずい沈黙に包まれる。

今度から、読み仮名も書いてもらおう。

一瞬で反省を済まして頭を切り替える。

「白衣 鷺生さん。ですね。」

そして何事もなかったかのように氏名を確認した。

そう。この程度で心乱しては、強靱な心を持つハードボイルドなど務まりはしないのだ。

「……恋人を探して欲しいと。」

「はい。」

問いかげに、依頼人こと白衣 鷺生が神妙にうなずいた。

翔太郎とて男性の中では背の高いほうだが、この白衣はその翔太郎よりも背が高くがたいがしっかりしている。名前の割に衣服は黒一色で、それが迫力を上乘せしていた。

最初、ドアベルに応えてドアを開けた時、一瞬だけ気後れしたことは秘密中の秘密だ。

その巨体を脱力感に縮め、白衣は話を続けた。

「一年半ほど前です。突然彼女の行方が分からなくなって……。警察にも、彼女の家族から捜索のお願いはしているのですが、芳しくなくて。」

クリップボードの紙をめくり、二枚目の書類と女性の写真を確認する。

そこには「水無 真理亜」と書かれていた。

「なるほど。それでこの都会の荒野をゆく孤高の狩人に相談に来たというわけですね。」

「……は？」

翔太郎は脚を高く上げ、振り下ろす反動で椅子から立ち上がると、くるりと机を回り込んで白衣の前に立ち止まった。

「いいでしょう。お引き受け致します。」

曰く言い難い顔の白衣の目線もなんのその。翔太郎は汗だくの顔を拭うこともせず自信満々に快諾の意を告げた。

「この街は俺の庭。必ずあんたの恋人を見つけ出してやるよ。」

階段を降りてきた鷺生は、振り返って「かもめビリヤード」の看板を見遣り、続いてその下の「鳴海探偵事務所」の立て札を見下ろした。

その横にへばりついている「ハードボイルド云々」の張り紙も。

その目つきは、たった今まで心細げに身を縮めていた者と同一人物とは思えないほどに深く暗く澱んでいた。

「……人選を誤ったかもしれない……。 どう思う？ 真理亜……」  
呟いた声音も、もし聞く者がいたならそれをまるで呪詛か怨嗟かと耳を疑うほどに暗くかすれていた。

そんな問いかけを虚空に残し、ひとりごちた鷺生は自分のバイクに跨り、エンジンを噴かすと走り去っていった。

鳴海探偵事務所・2

70年代のハードボイルドにかぶれた二階の探偵事務所は世を忍ぶ飯の姿。

この事務所にはもう一つの姿が隠し扉の向こうに存在する。

「フィリップ。 おい、フィリップ。」  
かんかんと階段を下りながら、翔太郎は慣れた様子で相棒の名を呼ぶ。

金網で上下に仕切られた広大な空間。 巨大な掘削機のような円盤が壁に埋め込まれ、その左右の壁は全てホワイトボードで塞ぎ尽くされている。

「あれ？ おい、フィリップ。」

「ここだよ。 翔太郎。」

姿が見えない相棒の声が足下から聞こえ、翔太郎は慌てて数歩下がってしゃがみ込んだ。

「おう、そんなトコにいたのか。」

金網で仕切られた上下のエリア。

その金網の下のフロアに、リクライニングチェアに身を委ねた少年がいた。

「目線の高さに縛られてるうちは、モノ探しのスペシャリストたる探偵としてはまだまだだね翔太郎？」

「うるせえよ。」

フィリップと呼ばれた少年は、天真爛漫な見かけによらずどこか迫力のある声音で何気なく指摘してきた。

「わざわざかくれんぼするため、そんな所に座ってんじゃないんだろ？」

「もちろんさ。必要な検索は、もう終わったよ翔太郎。」

全編白紙のハードカバーの本からは目も上げず、フィリップはペンだけ差し上げて左右のホワイトボードを示した。

「……。」

翔太郎は、立ち上がってホワイトボードに歩み寄った。

『連続探偵殺人事件』

そう銘打たれたホワイトボードには、以下、各被害者の名前と経歴、死亡状況や諸々がびっしりと書き込まれていた。

事件の名は翔太郎の勝手な命名だが、実際に名の通りの事件が最近連続して起きている。

被害者は組織探偵・個人探偵問わず、中には無認可の自称私立探偵も含まれていた。

そしてその全てが奇怪な死を遂げている。

「だけど、これといって共通する事項は見当たらない、か。」  
端まで熟読した翔太郎は、顔を上げてため息を吐いた。

「本当に無差別なのかあ？ まいったなあ」

「そうだね。もしかしたら、次に狙われるのは、翔太郎かもしれな

いからぬ。」

金網の上のフロアに上がってきたフィリップが、いつもの底意の知れない薄い笑顔で朗らかに告げてきた。

「おまえな。そんな不吉なコトをしれつと言ってくれんなよ!？」

「そんなことはないよ。僕は、狙い目が分かるなら、犯人の目星も付け易い、って言おうとしたのさ。」

「ぱたん、と本を閉じ、翔太郎の元へ歩いてくるフィリップ。

「君の推理力の見せ所だよ、翔太郎。」

「うあ。めっちゃ人事でやんの。」

翔太郎はしかめっ面で相棒のぺらっぺらな笑顔を睨み返す。

「まあいいさ。確かに俺ん所に来てくれたなら事件は終わるしな。

それよりフィリップ。『地球の本棚』に入ってくれよ。」

「なんだい?」

問い返すフィリップに、翔太郎は持っていたクリップボードを押しつけた。

「いま入った依頼だ。まずはいつも通り依頼者の裏を取る。」

依頼書を上から下までじっくり熟読したフィリップは、クリップボードを突き返すと、そこから二歩下がってこちらを向き直った。

「いいよ。……検索を始めよう。」

言って、目を閉じ両手を広げたフィリップは、やがてそのまま動かなくなつた。

フィリップの意識が、肉体を抜け、『地球の本棚』と呼んだ情報空間に接続したのだ。

『地球の本棚』。

そこは地球上で起きたあらゆる事象を記憶する情報空間。

そこが、フィリップの内面に存在するのか、別のどこかにあるのか、それは良く分からない。

そしてその情報空間に直接接続が可能なフィリップの主観では、各情報が書籍の形で無数の本棚に陳列されて無限に並ぶ空間だと認識

されている。ゆえに『地球の本棚』と呼称している。

これだけでは、ただ無限の情報の海の波間に漂っているだけ。だがフィリップは、この無数に存在する情報の中から、条件を絞ることで必要な情報を検索し引き出すことができるのだ。

『さあ。ひとつめのキーワードは？』

「まあ、ひとつめつちゅーか、人名なんだけどな。」

情報空間から自身の肉体を介して問いかけたフィリップに、頭を掻きながら翔太郎は答えた。

「えーと、「白衣、鷺生」。字は……」

『……』

情報空間の中。

フィリップの周囲の無数の本棚は、迅速に上下・左右・前後に配置を変え入り乱れて動くと、やがて本棚は一つ残らず消え去ってしまった。

『……！？』

「？ おーい。フィリップくん？」

翔太郎が肩を叩くも、フィリップから返事がない。

「……おい？」

『だめだ、翔太郎。』

「なに？」

その時、フィリップは有り得ないことを口にした。

『なんてことだ！翔太郎、「白衣 鷺生」のキーワードは検索が禁止されている！』

「んなにいいいいいい！？」

仰天する翔太郎。

「んなバカなことがあるか！？ 『地球の本棚』はただの情報の集まりだろ！？ 誰がそれを禁止できるってんだよ！？」

『わ、分からないよ！？』

フィリップは混乱に陥るが、状況にリセットをかけ、再び無数の本棚を召還する。

「……白衣、鷺生。」

もう一度検索のキーワードを設定するが、結果は同じ。本棚は一つ残らず消滅した。

「……だめだ。」

「ん〜、ならしようがねえ。じゃあ「水無 真理亜」のほうだ！」  
搜索内容の書面の名を読み上げる。

だが、その結果も同じく、検索が禁止されていた。

本棚が全て消滅した何もない白一色の空間で、フィリップは呆然と立ち尽していた。

「……なんで……」

## 風都・某所・1

「……で。今度は「凍死」、つてか？」

「正確な死因は、検死で調べてみないと分かりませんが……」

いつもの顔面に張り付いたような苦笑顔で呟いた刃野に、部下の真倉が生真面目に補足した。

とある住宅地の一角。

辺りは既に数台のパトカーが取り囲み、イエローテープが幾重にも巻かれ何事かと群がってきた野次馬から現場を遮断しており、警察官が辺りを右往左往している。

その中心に横たわるのは、この真夏の炎天下で、霜に覆われて青白くなつた、中年男性の死体。

それを、刑事二人が見下ろしていた。

「だったら別に俺がここでナニ口走つたって関係ねえだろよ。検死結果が変わるでもねえし。」

刃野刑事が、苦笑顔のままクエスチョンマーク型に湾曲したツボ押し器を肩に乗せて部下に言い返す。

「いえ、別に私は……」

「これまでにや、ええと……街中だつてのに「餓死」に始まり「溺死」に「衰弱死」。ずいぶん器用な犯人だよなあ？」

「はあ。」

ぐりぐりとツボ押し器を肩に押し当てて立ち上がる刃野。

「やはり、犯人は複数ということでしょうか？」

「まあなあ。」

部下の推理に曖昧に応えながら、刃野はツボ押し器を持ち代えた。

「ガイシャが全部「探偵」じゃなけりや、そう言われて信じてやつてもいいんだがな。おい、やってくれ」

言いながら刃野は振り返り、待機していた調査班にツボ押し器を振って仕事を促した。

「さあて……こりゃアイツの出番かねえ……」

現場から離れながら、刃野はぼつりとひとりごちた。

「その前に、次の被害者になつてなきやいいけどな。」

左 翔太郎・1

「いつきしツ!？」

不意のクシヤミでずれたハットの位置を直し、ハンカチで口元を拭う。

それはともかく役所から出てきた翔太郎は、腑に落ちない顔で首をひねっていた。

「……身元の情報は、役所にやあるんだよな……」

駐車場のバイクに腰掛け、封筒から引き抜いた書類を改めて眺める。それは、「白衣 鷲生」と「水無 真理亜」のそれぞれの戸籍の写し。

「……これでなんでフィリップの検索が効かないんだ？」

白衣 鷲生。男。生年月日からして現在二十一歳。

水無 真理亜。女。こちらも推定十九歳。ただし一年半ほど行方不明中。

白衣の現住所も、依頼書と同じ。これで依頼者の所在は確認できた訳だが。

「無駄な手間食わされちゃった……。いつもならこんな役所くんだりまで出向くこともなかったのに」

ぐったりと下ろした書類と入れ替えに上げた片手でハットごと頭を抱える。

「……まあいい。このまま調査に行つとくか。」

書類をしまい込み、懐からゴツゴツした携帯電話を引き抜いて展開した。

呼び出し音が繰り返されることしばし。

『戸籍とやらは取れたのかい?翔太郎。』

「フィリップ。ウチに一番近い探偵事務所を教えてください。」

お互い、前置きなしで話を始める二人。

『取れたんだね。ついでに探偵殺人の調査も同時にやるつもりかい？』

「まあな。そんなとこだ。で、どこだ？」

『うん。よく聞いて。』

「いや待て。やっぱメールで送れ。住所なんて長ったらしいモン覚えてられるか」

『どの口が言うかな。わかったよ。……ところで翔太郎。僕、その探偵事務所よりもずっと近い探偵事務所を知ってるんだけど。』

「はあ？なん……」

言いかけた翔太郎は、それに気付いて言葉を途切れさせた。

『翔太郎？』

「……ああ。俺も心当たりがあつたわ。」

「そいつ」を睨み付けたまま、翔太郎はそつとバイクから跨つていた脚を下ろして対峙した。

この駐車場の入り口に立ち、こちらを見つめたまま露出した上腕の生体コネクタに、今まさに振り上げたガイアメモリを挿し込んだ男に。

「……！」

距離が遠かったため、その正体を示すガイアウィスパ―は聞こえなかった。

だがその男は、体内にガイアメモリを取り込むと、その身を歪めて変貌させ黒き異形へと姿を変えてしまった。

まるで絵に描いたような漆黒の悪魔に、上から大量の苔と泥をこぼして固めたかのような異形、『ドーパント』に。

『……！』

ドーパントの咆哮が轟く。

だが、そのあまりにも抽象的な外見からはいったい地球の何の『記憶』なのか判然としない。

「なんだ、ありゃ。」

「なに？どうしたの？翔太郎」

「ドーパントだ！手貸せ相棒！」

携帯電話に怒鳴りつけ、通話を切って懐にしまい込み、代わって赤い複雑な機械を取り出した。

翔太郎がその機械を腹部に押し当てると、機械の端からバンドが飛び出し、翔太郎の腰を一周し、機械自身の反対端に組み付いてその機械をバツクルとするベルトを形成した。

続いて翔太郎はベストをはだけ、内側のポケットからガイアメモリを引き抜こうとしたその時。

『ooooooooo!』

再びドーパントの咆哮が響き、そのドーパントの背後から吹き出した白い噴煙が迅速に翔太郎を吹き抜け駐車場全体に広がって覆い尽くした。

「うわっ！？ なんだこりゃ!？」

まるで濃霧のような、もくもくと漂う白煙に巻かれ、すぐ隣にあったはずのバイクすら見えなくなる。

これではどこから襲いかかるか分からないドーパントに対処できない。

「ちっ！こんくらい、すぐに吹き飛ばしてやるさ！」

事実、翔太郎には文字通りのことを実行する手段がある。

既に事務所にいるフィリップが装填したのだから、バツクルの機械の右のスロットに、グリーンのガイアメモリが出現している。

翔太郎はそれを一段押し込み、己の持つガイアメモリをも装填しようとして、片足の位置をわずかにずらした。

「あっ!？」

その瞬間、足場が消滅し、バランスを崩しかけた。

そんなことがあるはずがない。ここは、アスファルトに覆われた平らな駐車場だったはずだ。

「なっ!？ なんじゃああああ!？」

傾いた体勢を立て直そうと反射的にその「蔦」を掴んだ翔太郎が

晴れた煙の向こうに見たものは。

「う、うわああああ！？」

そこは、切り立った断崖絶壁の途中。

役所の駐車場にいたはずの翔太郎は今、なぜか崖の中腹で今にも落ちそうな状態になっていたのだった。

「うわ！？ うわっ！？」

慌てふためく翔太郎。どうにか蔭にしがみつき身体を壁面に引き寄せる。

今、足下の土塊ががらごろと遙か下方へ落下していった。なかなか土塊が地面に激突する音が聞こえないくらい、高い。

見回せば、いったいどの秘境かという大自然の真っ只中。

「なんなんだよコレ！？ 『瞬間移動』なんて自然現象なんか、あるわけねーだろが！？」

ガイアメモリに封入される「地球の記憶」は、あくまでも「地球上で起きた現象・事象の記憶」である。

いかにドーパントの存在と能力が異常に見えても、その根幹たるガイアメモリの記憶は「通常の」現象の範囲を越えないのだ。

「いぢぢぢぢ！？」

一応、自らの頬をつねって確かめてみたが、やはりこれは現実。夢でもないし、岸壁の感触も幻覚ではない。

「ええいくそ！とにかくこっからは脱出しねえとな」

気を取り直した翔太郎は、自分のガイアメモリをバツクルのコネクタに差し込み、メモリスロットを斜めに押し倒した。

「……………」

無音。

何も変化は起こらない。

「はいい！？」

慌ててベルトを見下ろした翔太郎は、そこに有り得ない光景を見て仰天した。

バツクルの、右のスロットに刺さっていたはずのグリーンのメモリ

が消滅していたのだ。

確かに、あの時しっぴかり押し込んだはずなのに。

「おい！フィリップ！ フィリップ！」

必死に呼びかけるが、ダブルドライバーの装着によって接続されているはずのフィリップの意識の応えがない。

これまで、翔太郎とフィリップとの物理的距離がどれだけ離れていようと一切関係なく変身できていた。

だが今、フィリップとの接続は完全に断絶され、ガイアメモリの転送すら遮断されてしまったようだ。

「くそつたれ！なんなんだよいつたい！？」

毒吐いた翔太郎は、仕方なく鳶を握りこの崖を登り始めた。下には降りれない。鳶が、翔太郎の下で途切れているからだ。

「とにかく、どっか平らな所にも出れば……」

言いながら鳶をよじ登っていくが、どうもこの崖、ここからは頂上が見えないくらい高い。

……高い。高過ぎる。

「……おい。やっぱなんか変だろ。」

結構な高さを登ったと思ったが、景色にはあまりにも変化がない。

「ふん。これがまさか、ドーパントの攻撃の一部だとしたら……」

ふと、翔太郎の脳内の探偵の部分が閃いた。

煙を撒くなら毒ガスでも撒けばいいものを、あのドーパントはわざわざこんな回りくどいことをしている。

そして、ここで落ちればどうなるのか。そもそもこのシチュエーションがいったい何なのか。

さらにここ最近得た情報を翔太郎の灰色の脳細胞が瞬時に統合し、直感的に答えを導き出した。

「そうかよ！そういうことか！」

気色ばみ叫ぶ翔太郎。

だが突然、その目の前で掴んでいる鳶がみちみちと嫌な音を立てて千切れ始めた。

そしてとうとう鳶が切れて身を投げ出されたというのに、冷静な顔の翔太郎は慌てることなく左手首を天に向けてかざすと、そのゴツい腕時計のスイッチを操作した。

## 白衣 鷺生・2

役所の裏庭や駐車を一望できる、道路をまたぐ歩道橋の上で、鷺生は突如発生した大量の白煙が晴れるまでの一部始終を見ていた。あの間抜けな探偵はセオリー通り役所にやって来たが、今回探偵ばかりを狙う何者かもまたパターンを見切ってここにやって来たようだった。

「……だが、と言うことは、ヤツは違うようだな……」  
宛が外れ、つまらなそうに吐き捨てる。

その目は、駐車場の入り口に立つ異形・ドーパントを睨み据えている。

煙と共に姿を消した探偵のことは最早意識にもない。

「とはいえ、せっかくのエサをこれ以上無闇に潰されてもかなわない。それに、アレはアレで貴重な手がかりには違いない、か。」  
ひよい、と手摺りを乗り越え数メートルの落下をもとせせず着地した鷺生は、ドーパントに向かって歩き出した。

「！？」  
近寄ってくる存在に異常を感じたのか、そのドーパントが振り向いた。

立ち止まり、対峙する鷺生と黒き悪魔のようなドーパント。

その時、突如無関係の方向から幾筋もの白煙が物凄い勢いで吹き込んできた。

「！？」

「！」

思わずのけぞる鷺生とドーパント。

見回せば、それら煙の筋は、駐車場に置き去りにされていた黒と緑の前後ツートンのバイクの横に集まると、そこで渦を巻き、やがてその中から一体の人影を吐き出した。

「つてえ〜。脱出、成功だ！」

背中から地面に転倒したその男・ハードボイルド気取りの探偵が、ハットを押さえて絶叫した。

「ほう。生きて帰還できたのか」

手首の腕時計から生やしたワイヤーを植え込みの木の枝に突き刺して寝転がっている探偵を眺め、驚生はわずかに感心したように呟いた。

## 邂逅

「翔太郎！？ いったいどうしたんだい！？」

「なあに！連続探偵殺人犯の手厚い歓迎を受けて帰ってきたところさ！」

立ち上がった翔太郎は、服の埃を打ち払いながら、脳裏に接続復帰したフィリップに応えた。

見れば、ベルトの右スロットにもサイクロンメモリが復帰している。

「「餓死」に「溺死」に「衰弱死」。街ん中じゃあ有り得ないこれらの死因はどうすれば可能になるか！」

「ちよつとした限定空間に疑似的に作用することはドーパントの基礎能力だね。」

「弾丸やら水やらバンバカ吐き出してくるヤツもいたよなあ？どっから出てくんのかと思ったら、逆にその出所を武器に使うヤツもいるんだな！」

「すなわち。あのガイアメモリの記憶は。」

二人は同時にその推理に行き当たった。

「『遭難。』』

『つまり「stray」、ストレイメモリのドーパント。』

フィリップの言うところのその『ストレイドーパント』は、一瞬で交わされたフィリップと翔太郎の脳内の思考言語が聞こえたはずもないが、獲物に脱出されたことに激しく動揺しているようだった。

「わざわざ疑似空間に遭難させるだなんて回りくどいことじゃがっつて！じわじわなぶり殺しだなんて趣味悪過ぎるぜ！ 止めてやるよ！俺たちが！」

と、翔太郎が左手のジョーカーメモリを逆手に持ち換えたところで向こうに立っている白衣 鷺生を発見して動きを止めた。

「……！？ なんで、白衣さんがあんな所に？」

ストレイドーパントを挟んで向こう側に立つ鷺生は、ドーパントの異様を恐れるふうもなく、事務所で見せたものとは似つかない、落ち窪んだほの暗い眼差しで睨み付け対峙している。

「お前に、訊きたい事がある。」

これまた別人かと思うほど暗いかすれ声で鷺生が静かに告げた。声に振り返ったストレイドーパントに向かって。

「真理亜。半分、力を貸してくれ。」

続けて、その場にはいない何者かに向けて呟いたのち、その手に曲線でデザイン構成されたピンクの「M」のガイアメモリを取り出すと、シャツの喉元を力任せに引き下げ、露わになった胸板の中央に現れた生体コネクタにそれを突き刺した。

「なっ！？ 白衣さんもドーパントかよ！？」

突然の展開に驚愕する翔太郎。

しかも、見たことのない形状のガイアメモリだ。

《マリア！》

ガイアウィスパーがその記憶を告げ、やがてメモリを体内に飲み込んだ鷺生の身体は、ゆらめくように変貌を始めるとその体躯を締め、やがてそこに、人間・女性の姿が現れた。

「なんだあ！？ 人間！？」

ゆっくりと、うつむいていた顔が前を向く。

その顔は、翔太郎にも見覚えがある、搜索対象として渡された写真の女性、水無 真理亜その人であった。

「へ？ え？なに？ どうゆうこと？」

さしもの翔太郎も初めて見る異常の連続に混乱を禁じ得ない。

ガイアメモリを挿入した人間は、例外なく人間からはかけ離れた姿になるものだ。

それが、メモリを挿した男が女になるなど、意味が分からない。

そもそも特定の個人を記憶情報としたガイアメモリなど、有り得ないはずだ。

しかも、水無 真理亜は身に纏う純白のロングワンピースの腹部に、幅広の金属質のベルトを装着していた。

今、その中心部分に蒼く輝く「M」型の文様が現れ、続いてその上に「W」型の光が重なる、ひときわ強く閃光を放った跡には蒼い機械めいたバツクルとなつて収まっていた。

それは、翔太郎の持つ『ダブルドライバー』に非常に良く似ている。「わたしたちは、一人で二人の復讐者。」

凜とした声で告げた女性・真理亜は右手に取り出した蜂蜜色の「F」のガイアメモリをくるりと下に向けると、バツクルの右側のスロットに差し込んだ。

すると、その姿がばやけ、ベルトだけをその場に残して再び鷺生の姿になった。

その鷺生は、今度は左手に純白の「E」のメモリを取り出すと、逆手に持ち換えバツクルの左のスリットに振り下ろした。

「……………変身。」

呟くと、鷺生は左右のスロットを、それぞれ交差した逆の手で外側へと展開した。

バツクルの中央の青い機械は、操作に従いパンタグラフのように各部品が連動して動き、それはまさに「W」と「M」を重ねた「XX」の形を成した。

《フォービドゥン！》

《イレギュラー!》

右と左、それぞれのガイアウィスパーが各々の記憶を告げ、両手の甲を前方に差し向けた鷲生の身体を変化させてゆく。

身体の中心軸にセントラルパーテーションを構成しながら、左右それぞれ異なる色の強化外骨格が覆ってゆく。

右が蜂蜜色に、左が純白に。

全身を包むアーガイル模様の装甲は、肘や膝、肩や踵など突端が例外なく尖っており見た目に痛々しい印象を与える。

最後に頭部まで装甲が覆い尽くし、「XX」を描く複雑な突起が額に現れ、紫紺のホークファインダーがぎらりと輝き変化は完了したようだった。

『俺たちはXX。』<sup>ゼキス</sup>

鷲生の声の名乗ると、右半身がプリマドンナのように優雅に右手を差し伸べた。

『さあ。』

真理亜の冷徹な声に続き、翻った左半身が左手の親指を鋭く横一文字に一閃し。

『無様な悲鳴をあげる。』

親指を下に向け鷲生が処刑宣告を下した。

ゼキス・1

『はッ!』

裂帛の息吹と共に、ゼキスは一足飛びでストレイドーパントの目前にあっさりと肉迫すると、愕然として対応の遅れたドーパントのボディに右、そして左の拳を叩き込んだ。

『oooooooooo!?!』

苦悶のうなり声をあげて後退るドーパント。

『禁止の記憶』を司る右半身がドーパントの存在を禁じ、『変則の

記憶』を司る左半身が巧みなフェイントを織り交ぜることで、ドーパントにかわす暇も与えずに着実にダメージを加えてゆく。初手の接近を可能にしたのは、『イレギュラーメモリ』がもたらす変則的な動作がドーパントの意表を突いたおかげだ。

『ッらあ！』

再び迫りさらに殴り飛ばした。

もんどり打って転倒するストレイドーパーント。

転がっていった黒い体躯がようやくうつ伏せで停止すると、ドーパントは痙攣を起こしたように地面を殴り、やおら立ち上がった。

『ooooooooo!』

再び背後から大量の白煙を吐き出して辺りを、ゼキスを包み込んでゆく。

『……………』

だが、ゼキスは動かずに周囲を流れる霧のような煙をただ眺めていた。

やがて煙の流れが変わり、直後、凄まじい横殴りの吹雪に周囲の煙は残らず吹き散らされていった。

そこは、一面の白銀の嵐の世界。

役所の駐車場にいたはずのゼキスは今、雪山の猛吹雪の直中に立っていた。

『……………ふん。』

強化外骨格に覆われている限り、こんな吹雪などならダメージにはならないが、ここに留まっただけでは驚生の目的が果たせない。

ゼキスはバツクルのスロットを垂直にたたむと、左右のスロットから両方のメモリを引き抜き、右手は「R」と記されたスカーレットのメモリ、左手は「S」と記されたグリーンのメモリに持ち換える。それぞれをスロットに装填し、再び交差した両手でバツクルを展開した。

《《リジエクト！》》

《《スファイア！》》

ガイアウイスパーがそれぞれの記憶を告げると、メモリを交換された右半身が蜂蜜色からスカレットへ、左半身が純白からアイスグリーンへと中心軸から滲むように変色してゆく。

『リジエクトスフィア』にフォームチェンジしたゼキスは背中に形成された槍・『スフィアステイカー』を引き抜くと、メモリの『拒絶の記憶』と『領域の記憶』とを合わせこの場所からの脱出をすべく身構えた。

白衣 鷺生の名の由来

- ・Wの主人公「左 翔太郎」に倣い、同じく左右変身の左側を担当するXXの主人公の苗字も「左」関連にしよう考えた。
- ・「復讐」「死者」のキーワードより、死者に着せる和服の前合わせを「左前に着せる」という風習から、「死者の装束」を苗字に当てるため、「死に装束」「白装束」「白衣装」を経て人名っぽく変形させた。だがまあ普通は翔太郎のように間違えるだろう。

ダブル・1

「ちっ!? 言わんこつちやねえ!」

ゼキスと名乗る異様に変じた白衣がストレイドーパントの煙に巻かれどこの遭難スポットへ消し飛ばされたのを見て翔太郎は思わず毒吐いた。

『何か言つてたかい? 翔太郎。』

フィリップの茶々入れを無視し、翔太郎は改めて「J」と記された黒いメモリを逆手に構えた。

「変身!」

叫び、バツクルの左のスロットにメモリを挿し込み、交差した両手でバツクルを展開した。

《サイクロン!》

《ジョーカー!》

赤のスロットが連動して傾いて「W」の形を成し、右左それぞれのガイアウイスパーが各々の記憶を告げると、どこか気取った角度で両掌を左右に振り切った翔太郎の身体を迅速に変化させてゆく。

身体の中心軸にセントラルパーテーションを構成しながら、左右それぞれ異なる色の強化外骨格が覆ってゆく。

右が若草色に、左が漆黒に。

最後に頭部まで装甲が覆い尽くし、「W」を彷彿させる突起が額に現れ、深紅のホークファインダーがぎらりと輝き変化が完了した。

これが、ダブルドライバーを基にフィリップの魂と翔太郎の身体を合わせて力に変える、二人で一人の戦士、<sup>ダブル</sup>W。

右腕を振って半身に構えたダブルは、軽く広げた左掌にスナップを効かせてストレイドーパントへ高々と差し向けた。

『さあ。改めてお前の罪を数えろ。』

『そこはきちんと言っとくんだね翔太郎。』

『お前、いちいちうるせえよ!?!』

身体の左右で言い合いを始めるダブル。

『いかなる状況でも決して見栄を切れる位の心の余裕を忘れない、それがハードボイルドの』

『てい。』

翔太郎の文句を無視して、ダブルの右足が地面を蹴り付けその身を高く跳躍させた。サイクロンメモリによる『風の記憶』がその跳躍力を後押しする。

そのダブルの直下では、ストレイドーパントが放った煙の放射がアスファルトを撫で、そこに地割れを引き起こした。

と見た次の瞬間には地割れは消滅し、無傷のアスファルトに戻っていた。

『うわああなんだ今の!?!』

『ハードボイルドがどうしたって?』

しれっと告げたフリリップの言葉に口をつくむ翔太郎。

『局地的・限定的に遭難場所の方を喚び込むことも可能みたいだね。一瞬しか保たないみたいだけ。』

『……あそこに挟まれたまま消えたら、どうなるんだろうな。』

フリリップの分析に応えながら、ダブルは跳躍地点から離れた場所に着地した。

すぐさま振り向いてくるドーパント。

続け様に火炎放射のように遭難場所を発射してくるのを、ダブルは右に、左にかわし続ける。

『やはり、「あっち」に跳ばされるんだろうね。』

『今度は俺一人で戻ってこれる自信ねえぞ』

空間に穿たれた傷のように、密林や山岳の光景が現れては消えるのを飛び退いて見送るダブル。

その時、突如水晶が割れるような甲高い破碎音が辺りに響き、ドーパントが動きを止めた。

音が聞こえた方を見遣れば、なんとそこに先ほど消し飛ばされたはずのゼキスが左右の体色を変えて立っていた。

『あいつ……！？ やっぱハーフチェンジもできんのかよ！？』

新たに発現させたゼキスのどちらかの半身の効果か、先ほどまでは持っていなかった槍を構えたゼキスがストレイドーパント目掛けて疾く駆け出した。

ゼキス・2

『ふッ！』

スフィアステイカーによる鋭い刺突がストレイドーパントを激しく突き飛ばした。

『……！？』

この広大な敷地の端から反対端まで吹き飛ばす凄まじいパワー。それは右半身の『拒絶の記憶』がもたらした反発の効果が槍の刺突の威力に上乘せされたから。

スフィアステイカーを一振りして左脇に納めたゼキスは、ただただ右スロットのリジエクトメモリを引き抜き、代わって取り出したフォービドウンメモリをスロットに装填しバツクルを展開させた。

『フォービドウン！』

右半身をスカーレットからハニーイエローに変色させ『フォービドウンスフィア』にフォームチェンジしたゼキスは、改めて槍を構えると、突き立てた穂先でアスファルトを削りながらドーパントを遠巻きにするように駆け出した。

転倒したまま悶絶しているストレイドーパントの背後を迅速に回り込むと周囲を一周し、ドーパントを囲む円を描くとゼキスは地面から槍を引き抜いた。

ようやく起きあがったストレイドーパントは、逃げるつもりかふらつく足で後退るが、見えない壁にでもぶつかっていたかのように、一定

の地点で身動きを止めさせられた。

『ーッ!?!』

慌てふためくドーパント。見下ろせば、その足下にはゼキスが刻んだライン。なぜかその線から先に全く進めなくなっていた。

『その「領域」からの脱出を「禁止」した。もう逃げられん。』

ゼキスが、厳かに宣告した。

『だからもう、お前はお終いだ。』

ゼキスはバツクルの左スロットからスファイアメモリを引き抜くと、取り出した純白のメモリを挿し直しバツクルを展開した。

《イレギュラー!》

アイスグリーンの左半身がパールホワイトに変色してゆき、スターティングフォームである『フォービドゥンイレギュラー』の姿に戻るゼキス。

そして再びイレギュラーメモリを引き抜き、ベルト右側面に設置されているマキシマムスロットへ装填した。

《イレギュラー! マキシマムドライブ!》

強制増幅器によって高速演算を施されたイレギュラーメモリから倍加したエネルギーがアンクレットへと流入してゆく。

パワーを解放したゼキスの周囲の景色が揺らぎ、その周りだけ薄暗くなった。

一時的に出力が増したフォービドゥンサイドの影響で近くの空気分子の運動や自然光の光線までもが片端から進行を禁止された為である。

それはまるで、ゼキスのほの暗い怒りのオーラが顕現したかのような光景。

『……イレギュラーシャットダウン。』

ぽつりと呟いたゼキスが突如独特の歩法で飛び出し自身の引いた円内に飛び込むと、恐れおののくストレイドーパントの顔面をハニーエローの右掌ががちりと掴んだ。

直に接触することで指先ひとつ動かすことすら禁止されたドーパン

トはもはや身動きできない。

そしてわずかに分離した左半身だけが「その場で」縦に一回転すると、背後を巡って振り下ろされてきた白い踵が動けぬドーパントを脳天から一直線に唐竹割りに貫いた。

地面に叩きつけられたストレイドーパントはもがく力すら失い、やがてその場で大爆発を起こした。

炎がくすぶるその跡には、突っ伏す見知らぬ男と、宙でバラバラに碎け落ちたガイアメモリの成れの果てだけ。

## ダブル・2

ゼキスがドーパントにメモリブレイクを喰らわせた光景を、翔太郎は呆然と見つめていた。

『あいつ……いつたいなんでこんなことを……?』

『探偵に恨みでもあつたんじゃないのかい?』

『ちげーよ!?! 白衣のほうだよ!?!』

言い合う内に、ゼキスはその場にしゃがみ込むと、真っ白な左手で倒れ伏すドーパントの素体だった男の髪の毛を鷲掴みにして無理矢理持ち上げた。

『……答えてもらおうか。どこでガイアメモリを手に入れたのか。

売人の顔を覚えているか? それとも、お前の背後に誰がいるのか?』

右手で襟首も掴むと、ゼキスは男を吊り上げて立ち上がった。

『おいおい!?!』

『なん……だよ?』

男はメモリを破壊された衝撃で朦朧としながらも、苦悶の声で毒吐いた。

『おまえだって、持ってんじゃないか……』

『答える。』

なお男を締め上げるゼクス。

たまらず苦鳴を漏らした男は、頭を振りながら絶叫した。

「くそおっ！ふざけんじゃねえよ！？消えちまったミヤコのこと探せねえバカな探偵なんか、みんな死んじまえばいいんだああああ！うわああああああああああ！？」

脈絡なく泣き喚く男。

それはガイアメモリに飲み込まれた人間が行き着く末の狂乱状態ではあるが、それゆえ真に迫った心の叫びであった。

「……………」

まだ絞り上げるつもりか、男を掴んだまま動きを止めているゼクスに気付き、翔太郎は慌てて駆け出した。

迅速にゼクスに迫り、脚を蹴りつけ注意を逸らし男を掴む手を手刀で打ち払うと続く肩の体当たりでゼクスを押し退けた。

力なく泣き崩れる男を抱きかかえて背後にかばい、数歩先で体勢を立て直したゼクスと対峙する。

「……………なにをする。」

「あんだ、こいつを殺す気か！？」

怨嗟にまみれた暗い声音に、はつきりと懸念を叩き付ける翔太郎。

「さつきから物騒なことをブツブツと！？あんだいったい何なんだ！？なぜ俺に依頼した！？その「水無 真理亜」さんはなんなんだよ！？そのガイアメモリはどうやって手に入れた！？」

続けざまに疑問を並べ立てるが、ゼクスはまるきり無視して白いメモリを引き抜くと、グリーンのメモリを取り出して装填しバツクルを展開した。

《スファイア！》

左半身をアイスグリーンに変色させるゼクス。同時に背後から伸びてきた棒杖を肩越しに掴むと引き抜いてその穂先を突きつけてきた。

『『禁止』に『変則』に、『領域』の記憶……………？』

『やんのか！？』

フィリップの呆然とした眩きを聞き流しながら、ダブルも左スロツ

トのメモリを挿し換えた。

金属色の「M」のメモリを装填し、バツクルを展開した。

《メタル!》

ダブルの左半身が黒からシルバーに変換され「サイクロンメタル」にフォームチェンジすると、背後から伸びてきた棒杖・メタルシャフトを引き抜きゼキスの槍を打ち払った。

「なにがあつたか知らねえが、俺の目の前で殺しはさせねえぞ!？」背後に男を横たわらせ、ゼキスに向けて対峙するダブル。

サイクロンメモリとメタルメモリは、方や身軽さを、方や重厚さを特性とする相反した性質で実はあまり相性が良くないのだが、背後に人を庇いながらの拠点防衛ならば使い道もある。

迅速にメタルシャフトを回転させると、改めて構えた。

「……!」

ゼキスは黙したまま肉迫し、無数の刺突を繰り出してきた。

「おらあ!」

対するダブルもシャフトの横回転で次々と穂先を逸らし捌いてゆく。回転してきた槍の柄尻の殴打を縦にしたシャフトでブロックし、お返しに繰り出したシャフトの打突はくるりと回した槍の柄に絡め取られかわされる。

肩・肘・手首の曲がりにくい位置やシャフトの旋回範囲の外など死角を突いてくる、何やらやたら狙いの正確・精密なゼキスの槍の技巧に対し、サイクロンの速度で後の先を取りどうにか凌いでいるダブルとの両者の力は拮抗しているようだった。

「こなくそ!イヤな相手だ!」

業を煮やした翔太郎は一計を案じ、あえてシャフトを逸らすと、左肩で槍の刺突を受け止めた。

「なに!？」

「つてえ!？」

メタルサイドの硬度を越えて響いてきた衝撃に思わずうめく翔太郎だが初めて白衣の動揺を誘ったことへの感慨は押し込め、その一瞬

の際に右から繰り出したメタルシャフトの神速の突きがゼキスを激しく突き飛ばした。

『ぐっ！？』

間合いが開いた機を逃さず、ダブルはメタルメモリを引き抜くと、メタルシャフトに穿たれたマキシマムスロットに装填した。

《メタル！ マキシマムドライブ！》

『ちよつと？ 翔太郎、無茶はしないで』

『うおおおおお！』

強制増幅器によって高速演算を施されたメタルメモリから倍加したエネルギーが迸り、ダブルの周囲に強風が吹き荒れ始めた。

メタルシャフトの両端からも突風が吹き出し、ダブルはそれを目の前で回転させた。

『おおおおお！』

街中に飾られた風車が激しく回転し、遠くそびえる風都タワーの羽根車が逆回転を始める。

駐車場では木々がたわみ葉が千々に乱れ飛び、バイクは倒れ、車すらわずかに押し退けられた。

回転するシャフトに導かれたように流れを変えた暴風が、水平方向の竜巻となつて前方のゼキス目掛けて襲いかかる。

さしものゼキスも交差した腕でブロックした体勢のまま、踏みしめる足で地を擦り削り後退を余儀なくされてゆく。

ゼキスが他にもガイアメモリを持っているのかは知らないが、今のところ接近戦しかできないのなら、これで最早手出しはできないはずだ。

『……なるほど。お前は、違つようだな。』

そこに、暴風を越えて白衣の声が聞こえてきた。

『いいだろう。そいつは預ける。だが俺たちは諦めない。必ず真理亜を死なせた連中に復讐する。』

『だから、どういうことだよ！？ そこにいる真理亜さんは、なんなんだ！？』

これでゼキスを倒すつもりもない。こちらとしても、背後に庇った男が人質となつてゐるのだ。

暴風の制御に必死ながらも、翔太郎は問い返した。

『三つもメモリを使って、あんたは無事で済むのかよ!？』

『共に地獄に墮ちると決めた。真理亜を探れ。探偵さん。それで  
お前の疑問も、多少は解消されるだろうよ。……真に知りたくば、  
な。』

それが最後か、ゼキスは己を襲う暴風を利用して大きく飛び退くと、そのまま走り去つていった。

『……料金は必ず振り込む。』

『律儀だなおい!？』

もう一つ最後に言い残していった白衣に、翔太郎は思わずツツ込みを入れた。

## 左 翔太郎・2

大量の煙の発生と局地的な暴風の被害のせいか、あの後、役所の駐車場に消防と警察が集まつてきた。

いつもの通り、先んじて携帯電話で連絡を受けていた刃野刑事が相変わらずの苦笑顔でツボ押し器を担ぎながら翔太郎の元にひよこひよこことやつて来た。

「……ちわす。あの……連続探偵殺人の、犯人つす。」

足下に横たわる男を指さして、薄笑いで伝える翔太郎。

大都会の荒野をゆく孤高のハードボイルドでも、歴戦のたたき上げ刑事にはまだかなわないのだ。悔しいことに。

刃野は迫力ある苦笑顔のまま目の前までやって来ると、意外なことに溜め息を吐かれた。

「……フン。生きてやがったか。」

「は?」

刃野は拍子を取るようにかくかくと肩を揺すり、翔太郎の周りを一周して、足下に横たわる男を見下ろしてから、そつぽを向いた。

「……ん、まあ、良かった良かった。」

「はあ。」

翔太郎としても、怪訝な顔をするより他にない。

「ケガとかねえか？」

「はあ。」

「ん。なら、いい。」

ぽんぽんと翔太郎の肩を叩いてからまたひよこひよここと歩み去ってゆく刃野の後ろ姿を、ぼけつと見送る翔太郎。

刃野が、今回の被害者候補に入っていた自分のことを、不器用ながらも心配してくれていたのだということに気付いたのは、それから少し経ってからのことだった。

### 鳴海探偵事務所・3

「んで、そつちはどうだ？フィリップ」

事務所の隠し部屋の階段を降りながら翔太郎が問うが、リクライニングチェアで死体のように脱力しているフィリップからの返答はない。

「へソ曲げんなよ。よく分かんねえけど、白衣がメモリの力で自分たちの情報の閲覧を『禁止』だかなんだかにしてんだろ？」

「簡単に言わないでよ！」

やおら立ち上がったフィリップは声を荒げると、身振り手振りを交えせかせかと金網の上を歩き回りだした。

「閲覧を禁止だなんて、よくもそんなことを……ああなんだろこの気持ち……」

相棒の珍しい反応を見送りながら、翔太郎はメモ帳を開いて収獲を確認していた。

「……そっちはどうなのさ翔太郎」

「んあ？」

突如矛先を向けてきたフィリップとすれ違い、リクライニングチェアに転がり込んだ翔太郎は、メモの中身を読み上げた。

「ああ。殺された探偵のうち何人かは、やっぱり白衣からの依頼を受けていた。だが、死因は不自然死。つか今回のドーパントのせいだな。別に、例えば「水無 真理亜」を辿ってヤバい所に首突っ込んで始末されたってワケじゃないらしい。」

「ばさ、とメモ帳を顔面に落として被せ。」

「白衣が敵の尻尾を掴もうとして時いた畏に、偶然無関係のドーパントが食いついた、ってところだろうな。」

「それで、翔太郎はどうするの？」

「……白衣の住所ンとこ行ってみたら、もぬけの殻だった。だいぶ前にあの家を捨ててる。依頼人の所在が不明になっちまったが……」

そこで翔太郎は、ひとつ大あくびをした。

「どっちみち放っとくワケにゃあいかねえよ。俺の庭で、誰かを泣かしたまんまにやさせねえ。」

「攻撃されたのに？」

フィリップが、いつもの底意の知れない笑みで訊ねてくる。

「白衣が犯人を締め上げてた時、あいつ、犯人の境遇を聞いて、一瞬躊躇したんだ。……」「水無 真理亜を探れ」って意味はまだ良く分かんねえけど、あいつはただの破壊衝動の権化ってワケじゃないらしい。……もっと良く知る必要がある。」

顔の上のメモ帳をつまみ上げ、その机の上に放り投げてから両腕を頭上で組み寝直す翔太郎。

「なんとしても止めてやるんだよ。泣いてる奴も、泣かす奴も。付き合え、相棒。」

くしゃ、と眉間にシワを寄せ、傍らに立つフィリップにヘタクソなウインクをして見せる。

「ふうん。」

いつの間にか元の様子を取り戻したらしいフィリップは、いつもの顔でいつものようにうなずいた。

「分かったよ。翔太郎。」

白衣 鷺生・3

薄暗い部屋の中。

ベッドから立ち上がった鷺生は反対の壁にかかる姿見の鏡の前に歩み寄った。

ここは当面の隠れ家とした廃屋の一室。

敵に足元を探られるのを防ぐ為、当然元の自宅は引き払ったが、真理亜を死なせた者への復讐を遂げるまでこの風都を離れるつもりもない。

それに、ばら蒔いた種は思わぬ収穫をもたらした。

あのハードボイルド気取りの探偵。

ガイアメモリの力を使いこなす彼ならば、きっと鷺生の目的の役に立つ。

いずれ真理亜を殺した相手に辿り着けるだろう。

「真理亜……」

呟いた鷺生は、ピンクのMのメモリを取り出すと、はだけたYシャツの下の素肌、露出した厚い胸板の真ん中にある生体コネクタにそれを突き立てた。

《マリア!》

ガイアウィスパーが告げ、メモリを飲み込んだ鷺生の身体がゆらめき体積を縮めると、やがてそこに白のロングワンピースを纏った女性・真理亜の姿が現れた。

「……鷺生……」

同じく呟いた真理亜は、姿見に映る自分の顔を見つめた。

いや。その瞳の中にある、今や一身となった最愛の者、驚生の瞳を。  
『真理亜。』

「驚生。」

脳裏の呼びかけに応え、真理亜は鏡にすり寄ると、その表面、鏡に  
映る自らに、自らの内にいる驚生に、そっとくちづけた。

『報いは、必ず。』

t o n e x t   f i l e . . .

いかがだったでしょうか。

元の世界観を損なわないよう配慮しつつ、オリジナルのキャラクターやドーパントをネジ込んでみたのですが、効果的に働いているかどうか。

最初の前書きに書きました通り、この「File・0」はパイロット版であり、今後原作の設定の変遷によっては、続きを投稿する際には変更・改造したりします。

どうか自分のしたことが、原作を穢したり変にダブったり先読みになったりしないよう祈るのみ。

とはいえ、新しいものを見ると、つい妄想が溢れ出して止まりません。

なにやらネガティブなキーワード満載の鷺生・真理亜ペア。

「XX」の意味や真理亜の存在の謎、未使用のメモリや能力、彼らの思惑と行く末等描いてみたいものはだいたいそろっているんですが、まだまだ下地となる原作のお勉強が必要。

いずれ条件がそろった時に（もしくは忘れた頃に）また続きを御披露したいと思います。

ではまた。

## File・01 Dの肖像/逆説的逆説(前書き)

御注意。 第三部分までの「File・0」はパイロット版でしたが、ここから「完全版」の開始となります。

「File・0」から若干設定が変わっているほか、主人公は鉄槻オリジナルキャラクターとなり、翔太郎を含めたレギュラーメンバーは風都の住人として脇役的ポジションになりますので御注意下さい。

なお、時系列は原作の序盤、照井 竜の登場以前の辺りからとなります。御了承下さい。

File・01 Dの肖像／逆説的逆説

俺は風。この風都に吹く一陣の風。

流線型のヘルメットにサングラスをはめ込まれたゴーグルまでかけた男が、電動アシストモーター付きのママチャリをかつ飛ばす。無数のクラクションを浴びながら車の間を駆け抜け、反対車線に滑り込んでいった。

俺は風。風は誰にも捕まえることができない。ただ吹き抜けてゆくだけ。

『その自転車！止まりなさい！』  
大勢のパトカーを引き連れ、男の運転するママチャリが白昼の街を爆走してゆく。

「……風に「止まれ」だなんて。残念な奴だ……」  
背後から響いてくる拡声器の声に眉をしかめて心底悲しげに頭を振った。

自ら風であることをやめ、心を縛り付けて停滞してしまった哀れな奴らにはもう同情してやることもできないが、せめてお前たちの分も俺が吹き荒れてやる！

『あ！？ こらー！？ 止まれー！？』  
なお加速し出したママチャリに、拡声器から罵声を吐き出したパトカーも慌てて追いつがった。

白衣 鷺生。二十一歳。男。

いい加減見飽きたその男の調書をしかめっ面で眺めながら、パイプ椅子にふんぞり返った年配の刑事がツボ押し器を肩に担いでぼやいた。

「おい、シユー。おまえママチャリでパトカー振り切んなよ!?」  
結局捕まった男、机の対面に腰掛ける白衣 鷺生は突きつけられたツボ押し器の前で朗らかな笑顔を見せた。

「てゆうかジンさん、風を捕まえないうでくださいよお。風ってのは掴めないんですからあ。」

「お前は風じゃなくて、にんげんだ!」  
ごん、と机をツボ押し器が叩くが、朗らかに微笑む鷺生には効いた様子もない。

肩幅の広い、がっしりした体格に似合わぬ子供っぽい笑顔も相変わらずだ。

「ったく、下らねえことで常連になりやがって。しまいにや病院に放り込むぞ!? ココロの!」

「はっはっは。ジンさんはたまに良く分からないことを言うなあ。」

「おまえ程じゃねえよシユー。下らねえこと言ってねえで、ここと、ここんとこ、書け」

調書の箇所を示してペンを差し出される。

「……あ、いた!」

そこに、この風都警察署の正面玄関から駆け込んできた、鷺生と同じデザインのジャケットを羽織った少女が受け付けカウンターの向こう側に座る鷺生を見つけるなり指さしてのしと迫ってきた。眉を急角度に釣り上げた顔の後ろでポニーテールがひよこひよこ揺れる。

「ジンさん、すみません!? ……鷺生、あんたまたやらかしたの!?!」

「変だよ。風は捕まえないのにさ。」

「はいはい変なのはあんたね。」  
「ぱたぱたと手を振って妄言を振り払う。」

「だいたいバカみたいに速く走って、拳げ句捕まったら本末転倒でしょう!? 今日もなかなか帰ってこないと思っただら!? いい加減覚えなさいよ!」

「おう、あずみ。もういいから連れて帰れや。」

驚生が書き終えた調書を縦に叩いてそろえ、ジンさんこと刃野刑事が少女に向けて言った。

「たいがい気をつけねえと、その自転車便だかの稼業だつてまずいことになんぜ!? しつかりしとけよ!」

「はい! すんません! ……ほら、あんたも」

「ええ!?!?」

少女に後頭部を掴まれ、無理矢理頭を下げさせられる驚生だった。

風都における小荷物配送業、自転車便『シルフィード』。

あずみの父親が経営する会社であり、「エコの街」としても県外にも知られるこの風都においてはその街のシンボルに則った、町中を駆け回る自転車に跨る青いジャケット姿は風都の顔のひとつとして親しまれている。

「……だからさ、そういう下らないことで、ウチの会社にドロ塗られると、困るわけ。分かる?」

「うん。分かったよ。今度こそパトカーだつて振り切つて見せる。」  
決意に満ちた顔で、ぐっと拳を握った驚生の頭を振り下ろされたクリップボードが叩き抜いていった。

「あんたさ。なんで競輪選手になんないワケ?」

「……あんな同じところぐるぐる回るだけなんて、風のことじゃないよ。」

叩かれた頭をなでながら、口を尖らせて言う。

そんな驚生の言い種に、あずみは頭を抱えた。

そもそも白衣 鷺生を『シルフィード』の非常勤職員として引き込んだのは、この少女・東雲しのぶ・あずみ あずみだった。ある時期以降、自暴自棄になった鷺生の気を紛らわせる為に、もっとも向いていると思われることを押しつけたのだ。

実際、風都の配送圏内であれば、どんなに遠い場所でも鷺生の自転車は誰よりも速く到着して見せる。

そのあと、今日のようなノリでなかなか帰って来ないのだ。だから、鷺生を動かすのは余程緊急性の高い依頼に限られた。

「ああもつ。いつそ今度は振り切ってもらったほうがいいかもね。」

「うん！頑張る！」

「冗談よっ！？ 真に受けんな！ あと皮肉ねっ！？」

再びクリップボードが今度は二連続で叩き込まれた。

僕は、小さい頃から絵を描くのが好きだった。

お母さんに誉められるのが嬉しくて、落書きをいっぱいしてからずっと、僕の人生は絵と共にあった。

そのお母さんが病気で亡くなって、それからしばらくは絵なんかまともに描けなくなっただけ、今ではまた描き続けている。

そうすることが、お母さんの願いでもあると思ったし、やめて何もかもなくすだなんて、できなかつた。

誉めてくれるあの声がないのが、少し寂しいけど。

「素敵な絵だね。」

とある画展に出展したある時、設置した自分の絵のパネルの角度を調整していた僕に、そう声をかける少女が現れた。

長い黒髪を両脇に括って垂らし、ロングワンピースにカーディガンを羽織っている。清楚とも活発とも取れるその不思議な印象に目を奪われた。

屈託のない天真爛漫な笑顔で、少女は大きなパネルを眺め回しては、近付いたり遠のいたりして僕の絵を熱心に見ていた。

「……どうも。」

最初にどきりと心臓が鳴ったのは、その少女の言葉が、僕の欲しかったお母さんの言葉に雰囲気似ていたから。

そう自覚したら、なぜか返事をするのにもどぎまぎしてしまった。

「聞いたよ？金賞確実だって。」

「え？」

「うん。わたしもそう思う。だって、とても素敵だもん。」

「ええ、ええと、その、……ありがとう。」

まっすぐに見つめてくるきらきらした瞳に、僕は熱くなった顔を伏せてどうにか答えた。

「……瀬能 瑞希くん？」

「へ？」

唐突に、名乗りもしていない名前を呼ばれて顔を上げると、少女は展示パネルの隣に貼られている作品解説の紙をまん丸の瞳で見つめていた。

確かにそこに僕の名前が書いてある。

「う、うん。そう。」

「わたし、水無 真理亜！よろしくね！」

くるりと身体ごと振り向いて朗らかに名乗る少女に、僕の心拍数はおかしくなりっぱなしだ。

「ねえ、あなたの作品って、ほかにないの？」

「ああ、今ここには持ってきてないけど……。」

「えー！見たい！見たいよ！」

作品の所在が知れるなり、飛び跳ねてはしゃぎ出す水無さんに、僕はどうしたらいいかよく分からない。

「えーと、でも、どうしょ」

「この展示会って、まだ始まったばかりだよな？　ねえ、ここでまた会えないかな。その時に、持ってきてもらえないかなあ」

いいことを思いついたようにはしゃいだ水無さんは、途中で心細いな様子でこちらを覗き込んで懇願してきた。

もちろん、僕に抗えるはずもなかった。

恋に落ちたのだと、それだけは自覚できた。

その二人の様子を、物陰から仄暗い目つきでじっと見つめる男がいた。

『風麵』と銘打たれた看板の周りで色とりどりの大量の風車がくるくる回る。

あらゆる街角で見受けられるこの屋台は風都で最も人気のあるラーメン店『風都ラーメン』の出張店舗。風都内にかなりの数が出店している。

その内のひとつの前に驚生の駆るママチャリが後輪を滑らせて急停止した。椅子に座ってラーメンをすすっていた客が驚いて振り返る。

「ちわす！『シルフィード』です！」

「待ってました！」

屋台の向こうのおっちゃんが、にこやかにラップフィルムで密閉された丼ふたつをがっちり固定したトレイを差し出してきた。

それを受け取った驚生はママチャリの荷台に設置されたコンテナに

入れると再び自転車に跨り、おっちゃんに敬礼した。

「んじゃ、行ってきます！」

「おう！頼んだぜ！」

次の瞬間には鷺生の後ろ姿は彼方で小さくなっていった。

『シルフィード』の小回りは、町中に屋台を展開する『風都ラーメン』の出店形態と見事に融和していた。

風都ならばどこへでも、「風麵」のおいしさをすぐにお届け！

などと言う謳い文句で、注文を受けた本部から、最寄りの屋台と『シルフィード』に同時に連絡が入るのだ。

特にここで鷺生の健脚が活用されていた。

「んお？」

ふらふらと街を歩いていて、まるで傘か箒のような放埒な髪に長い顔、奇矯なファッションの男がコンクリートの壁に気付いて歩みを止めた。

「……なにコレ。すごいリアルじゃん？ 写真撮る写真」

言ってせかせかと携帯電話を向けて操作しだす。

その男の背後を鷺生がもの凄いスピードで駆け抜けていった。

が、後ろ向きで地面を蹴りながら男の元まで後退してくる。

「ウオッチャマン。なにしてんの？」

「ん？ あら、シューちゃん」

ディスプレイの構図を決めあぐねていた男・ウオッチャマンが鷺生を振り向いてきた。

「ねえねえコレ見て」

やおら近寄ってくると、自転車のスタンドを立てた鷺生の腕を取ってそれを指さす。

それは、コンクリートの壁面に描かれた、人間の女性の絵だった。

それも、まるで等身大の写真を貼り付けたかのように精巧でリアルな描画。

「もの凄くリアルじゃない？　こんなストリートアート初めて見たよ！　みんなに教えてあげなきゃ」

言いながら、改めて携帯電話のカメラを構えるウォッチャマン。当然「ウォッチャマン」なる名前はいわゆる通り名で、この男は絶大な人気を誇るブロガー。

こうして街を徘徊しては、風都のありとあらゆる情報をブログを通じて提供しているのだ。

「うーん。でも、この絵なんか変じゃない？」

「え？なにが？」  
ぷっ。

驚生が吹いたのを見てウォッチャマンが大慌てで手を振った。

「いやいやいや！？　シューちゃん今ので笑っちゃダメダメ！？　ボクの尊厳にも関わるから！？」

「うん、ゴメン。いや、あかさ。これ描いた人は、なんでこの絵を描いたのかな。」

「へ？」

キョトンとしたウォッチャマンは、長細い顔を器用に上下に歪めて壁画と驚生とを見比べる。

「なにになに。どうゆうこと？」

「いやあ。」

驚生は壁画の人物を指さし。

「なんか、ポーズとかモデルとか、なんか意図があるように見えないうし。構図もへったくれもないし。」

「んー。」

それは、ただ立っている、あるいは何らかの動作の途中の人間で、なんらそこに主題が見えてこない。

「アレじゃないの？　場面の一瞬を切り取る」とか。　ま、何より上手だからいいよ」

「うーん。」

それきり驚生に構わず写真を撮りまくり始めたウォッチャマンの後

ろで首を捻っていたが、結局驚生は再び自転車に跨って走り去って行った。

その後、ウォッチャマンのブログに掲載された、風都のあちこちで発見された多数のリアルな壁画はたちまち風都中の噂になった。

## File・01 Dの肖像／逆説的逆説（後書き）

最終回と劇場版の興奮に煽られて、我慢できずにとっとなら始めてしまいました。

パイロット版との変更点は、鷺生の性格・立場くらいでしょうか。ほかはまあ「File・0」のような事があったものとして時間が進んでいます。

File・01 Dの肖像／演者の恋思い

「バカ抜かせ！「壁に落書き」ってなあ刑法261条「器物損壊罪」だぞ！？ 必ず見つけ出してしよっぴけ！」

裏張り手を食らった鼻を押さえながら、上司である刃野に付いて部屋を出てゆく真倉刑事。

件の壁のリアルな落書きの噂は風都警察署の耳にも入ることとなった。

「あー！ー！？」

廊下を歩く刃野の後ろで真倉が素っ頓狂な悲鳴を上げ、刃野がじろりと振り向いた。

「おまえな。落書きの悪さの程度も知らない上にやかましいだなんてどんだけガキンチョなんだよおまえは」

言いながら真倉の元まで戻った刃野は、真倉が口をぱくぱくさせて指をさしている壁を訝しげに覗き込んだ。

「なんだ。これがどうかしたか」

それは、風都での行方不明者の顔写真を掲載した掲示板。

その内のひとり指さし、真倉は震えていたのだ。

「……あ、こ、この人、れれれ例の落書きで、っかつかつ描かれていた……」

「！？ そいつの身元出せ！周辺に聞き込みだ！」

真倉の肩をどやしつけ、刃野は廊下を駆け出していった。

数日前のことだった。

「……綺麗な絵ですね。」

いつもの自然公園で画材一式を並べてイーゼルに立てたキャンバスに風景を描いていた所にその男は突然現れた。

「僕も昔、絵を良く描いていましたね。　と言っても、子供のらくがきの範疇でしたが。」

その男はにこやかに、ひとの心の垣根を自然と下げさせる人懐っこい笑顔で話しかけてきた。

だが、今それどころではない。

もっと、巧くなりたいのだ。

饒舌な男の話に飲み込まれ、いつの間にかそんなことまで口走ってしまったところで、男は持っていたスーツケースを広げて中身を差し出してきた。

「実は私、こういう物を取り扱っております。」

驚くべきことに、その中にぎっしりと並べられていたものは、噂に聞いた「ガイアメモリ」だった。

確かに聞いた通りの特徴の形状をしており、とても驚いた。

「今のあなたに打ってつけの、オススメの一品があるんです。」

そう言つて、男は選び出した一本を眼前に掲げて見せた。

怖気に身を引くと、男は朗らかな笑顔で。

「はは。お気持ちは分かりますが、噂が全てではありません。これは、あなたの願いを叶える為の、言わば補助器具。　もっと絵が巧くなりたいんでしょう？　なれますよ？　これがあれば。　ただそれだけの道具なんです。」

決して安い金額ではなかったが、買えない値段でもない。  
有り金と引き替えにそのガイアメモリを手渡した男は、相変わらず  
の屈託のない笑顔で立ち上がった。

「それでは、ごきげんよう。あなたの願いが叶えられ、進化したあ  
なたに幸せが訪れることを、この風都の風と共に祈りしておりま  
す。」

その男の朗らかな笑顔と、ぴしりと着こなしたスーツの襟元の、血  
のような赤い一点のシミがついた純白のスカーフがやけに印象的だ  
った。

広い河川を見下ろす広大な土手の上を、長大な土埃の尾を引いてマ  
マチャリを漕ぐ鷺生が爆走していた。

「うはははははは！なんぴとたりとも、俺の前は走らせー！ー  
ーん！！」

「ごーと風巻く音を立て、ランニング中の野球部員たちの列を追い抜  
いてゆく。」

「うはははははははは！……ぬ？」  
その鷺生の元に、機械仕掛けの蝶のようなものが舞い降りてきたの  
を見て鷺生は急停止した。

やがて下で待ち受ける鷺生の手元に舞い降りた機械の蝶は、迅速に  
変形すると鷺生の掌で大きめの携帯電話となった。

そのディスプレイに文字列が表示されている。

『そろそろかも。』

それを見た鷺生の目つきが、瞬時に一変した。

携帯電話をたたんでしまつと、懐から小さな栄養剤の小瓶ほどの大きさの、ただし鉱石のように綺麗に細長くカットされた多角形の棒を取り出すと、スイッチを押し込み、自転車のハンドルの付け根に先端から生えた端子を押し当てた。

《Dash!》<sup>ダッシュ</sup>

電子音声が発声されたのち、ハンドルに押し当てられたその棒は、見る見るハンドルの中に潜り込んでゆく。

すると、自転車の姿が歪み膨張し、瞬く間に一台のバイクに変化した。

改めてその変化したハンドルを握った鷺生は当たり前のようにバイクを操作し、暗い目つきのまま黙して発進させていった。

A1サイズのファイルケースを抱えた瀬能 瑞希は、参加している画展が行われている美術館のロビーのベンチに腰掛けて、非常に緊張した面持ちで水無 真理亜を待っていた。

初めて出会ってから、数日おきに二回ほどここで待ち合わせして、自分の作品を請われるままに披露していた。

かなりの数を描き上げていたため作品の点数は膨大な数にのぼり、実は自宅の方に呼んだほうが効率が良いのだが、女の子を家に誘う度胸など瑞希にはなく、だが考え方を変えてみれば、小分けにして見せるということは、それだけ会う回数が増えるということでもある。

自らの度胸のなさに感謝しながら、瑞希は三度目の逢瀬に胸をときめかせていた。

瑞希が待ち合わせ場所に行っているこのロビーは一面がガラス張りになっており、その向こうは どころの芸術家がデザインしたとかいう噴水が仕掛けられた石畳の庭園となっていた。

ここに座って、それを眺めるのが瑞希は好きだった。

ここを待ち合わせ場所にしたのも、水無 真理亜に見せたいが為で、実際に見た真理亜に大はしゃぎされて瑞希は大いに喜んだのだ。

(今日もまた一緒に見てくれるだろうか。)

その時を楽しみにしながら眺めるガラスの向こう側の通路を、いま一組の男女が通過していった。

が、突如その二人の目前に何かが降ってくると、その「何か」は男を掴むと石の壁に押しつけ、「左腕」の先の触手のようなものでぐりぐりと男を圧迫するとたちまち男は厚みを失い、石の壁に貼り付いてしまった。

いや。

壁画にされてしまったのだ。

(……………え?)

あまりの異常に頭が光景を受け入れず、呆然とする瑞希。

そしてその「何か」は腰を抜かして後退る少女ににじり寄り、上から触手を振り下ろして少女を床に埋め込み「床絵」にしてしまった。

(……………え? え?)

続いてそいつは瑞希の方を見るとガラスに近付き、左腕の触手でガラスの表面を撫で始めた。

すると見る見るガラスに色が付き、やがて全身が隠れるほどの大きさの茶色の長方形を塗り潰すとそれは瞬間に立体感を増して「扉」になり、がちゃりと本物の音を立てて外側から開かれた。

「……………あ……………」

そこに現れたのは、まるで色とりどりのゲルを大量に重ね合わせ、無理矢理ヒト型に盛り上げたかのような化け物。辛うじて二足歩行する脚と、左右に突き出した腕らしきものが付いている。その左腕は、まるで無数の触手を束ね、細かい毛の束を先端からぶら下げた奇怪

な「筆」に見えた。

「……………あ……………ああ……………」

呆然と、恐怖に竦み上がる瑞希の前で、そいつは片手を肩の辺りに上げると、そいつの身体は輝きに包まれて体軀を縮め、やがて人間の姿になつてしまった。

いや。逆だ。

噂には聞いたことがある。街の闇で取り引きされ、ヒトを超人へと変える怪しい器具がばら撒かれている、と。

その男の手にある、パソコンに使われる記録媒体に良く似た禍々しい直方体を見て瑞希はその名を思い出した。

「……………が、ガイアメモリ……………」

「そうだよ。」

そのガイアメモリを持つ男が、瑞希を睨み付け不機嫌に言った。

「もー限界だよ。 いっつもお前が金賞で、この俺が万年二番手？ ふざけんなよ！俺の絵の方が優れてんのによ！」

「……………あ、相沢くん……………」

あまりの異常に、その男が誰なのか今ようやく気付いた。

いつも瑞希の作品と頂点を競り、いつも銀賞とされてきた、同じ学科の人間だった。

「……………どうして……………」

「あ……………！」

呆然と聞き返した瑞希に、相沢はいきなり絶叫した。

「今言つたじゃねえか！？ どーしてこんなボンクラが評価されて俺がされねえんだ！？ もーワケわかんねえよ！？」

地団太を踏んで吐き散らす相沢。

「いいか！？ 俺はもうお前なんか及びもつかない画力を手に入れたんだ！ 実物に迫る描画力を！ それをお前に見せて、完全に屈服させてやるうかと思つたけど、気が変わった！お前も俺の作品にしてやるよ！」

その時、相沢の絶叫に紛れて電気自動車のモーターのような音が聞



電子音声と共に、中央のガイアディスプレイにハートマークと両掌を模した「M」のマークを描いたガイアメモリは鷺生の胸に吸い込まれてゆく。

すると鷺生の姿が揺らめき、その体躯を縮めるとそこに人間、女性の姿が現れた。

「…………え？ あれ…………？」

がっしりした体格の男に代わってそこに現れたのは、瑞希に見覚えのある姿。

水無 真理亜その人だった。

水無 真理亜は身に纏う純白のロングワンピースの腹部に、幅広の金属質のベルトを装着していた。

今、その中心部分に蒼く輝く「M」型の文様が現れ、続いてその上に「W」型の光が重なる、ひととき強く閃光を放った跡には蒼い機械めいたバックルとなって収まっていた。

「わたしたちは、一人で二人の復讐者。」

凜とした声で告げた真理亜は右手に取り出した蜂蜜色の「F」のガイアメモリをくるりと下に向けると、バックルの右側のスロットに差し込んだ。

すると、その姿がぼやけ、ベルトだけをその場に残して再び鷺生の姿になった。

その鷺生は、今度は左手に純白の「E」のメモリを取り出すと、逆手に持ち換えバックルの左のスロットに振り下ろした。

「…………変身。」

呟くと、鷺生は左右のスロットを、それぞれ交差した逆の手で外側へと展開した。

バックルの中央の青い機械は、操作に従いパンタグラフのように各部品が連動して動き、それはまさに「W」と「M」を重ねた「XX」の形を成した。

《フォービドゥン！》

《イレギュラー！》

右と左、それぞれのガイアウィスパーが各々の記憶を告げ、両手の甲を前方に差し向けた鷺生の身体を変化させてゆく。

身体を中心軸にセントラルパーテーションを構成しながら、左右それぞれ異なる色の強化外骨格が覆ってゆく。

右がハニートイエローに、左がピュアホワイトに。

全身を包むアーガイル模様の装甲は、肘や膝、肩や踵など突端が例外なく尖っており見た目に痛々しい印象を与える。

最後に頭部まで装甲が覆い尽くし、「XX」を描く複雑な突起が額に現れ、紫紺のホークファインダーがぎらりと輝き変化は完了したようだった。

『俺たちはXX。<sup>ゼキス</sup>』

鷺生の声が名乗ると、右半身がプリマドンナのように優雅に右手を差し伸べた。

『さあ。』

真理亜の冷徹な声に続き、翻った左半身が左手の親指を鋭く横一文字に一閃し。

『無様な悲鳴をあげる。』

親指を下に向け鷺生が処刑宣告を下した。

## File・01 Dの肖像/裏切りのキス

いつの間にか眼前に迫っていたゼキスに驚愕する暇もなくドロウ・ドーパントが殴り飛ばされた。

「oooooooooooooo!？」

ドーピングにより身体能力・動体視力・反射速度などが劇的に上昇している上、地球の記憶を取り込んだことによる高揚感、いわゆる「ハイな状態」であるにも関わらず、ゼキスの初手の接近に気付けなかったことにドロウ・ドーパントは激しく混乱していた。

それはゼキスの『変則の記憶』を司る左半身が、巧みなフェイントを織り込んだ変則的な動作が意表を突いたせいだということを、ドロウ・ドーパントは知る由もない。

立ち上がったドロウ・ドーパントをすたすたといった歩調で迫ったゼキスがなおも殴り、蹴りつけた。

見えているのに、巧妙なフェイントのせいで避けられた拳に、蹴りにドーパントが自ら身を差し出すようにしてヒットする。

どうにも回避できない不思議な攻撃を喰らい続け、ドロウ・ドーパントは大きく吹き飛ばされた。

「あああああつ!？ な、なんだよこいつうつつ!？」

完全に泡を食って狼狽するが、床に突いた自分の手が変貌していることを思い出し、ドロウ・ドーパントは慌てて左腕の「筆」を床にこすりつけ始めた。

「……なにをしている。無様な悲鳴には程遠いぞ……」

必死に床をこすっているドロウ・ドーパントに大腿で歩み寄ると、ゼキスは四つん這いになっているドーパントの顔面めがけて蹴りを繰り返した……動作をしながら穴に落ちていった。

「っは! やった! やったぞ!」

やおら立ち上がったドロウ・ドーパントが、そこにできた「穴」を見下ろして歓声をあげた。

ドロウ・ドーパントの足下に床には、いつの間にか巨大な穴が開いていた。

いや、ドロウ・ドーパントが美術館の廊下に「奈落の穴の絵」を描き、それが実体化したのだ。

これがガイアメモリ「DRAW」の力。

「描画の記憶」により、本来は有り得ないものを世界に直接描き込むことができる。

『そ、そうだ。これでも喰らえ！』

氣勢を上げたドーパントは、左手の「筆」で空中を撫で回し始めた。すると巨大な岩石が描き上げられたちまち実体化すると重力に従って穴に落下してゆく。

『もつと！ もつとだ！』

叫び、次々と大岩を宙に描き出しては穴に落としてゆく。

何個か岩を放り込んだところでドロウ・ドーパントは穴の様子を伺い、やがて最初の位置で震えている瑞希の方を向いた。

「……………ひっ!?!」

『さあて。邪魔者はいなくなった。お前はとびつきり前衛的にぐアパンギヤルド

ちやぐちやに描いてやるよ！』

ドロウ・ドーパントが左手の「筆」を振りかざし、瑞希に襲いかかった。

『……………!』

底の見えない縦孔を落下しながら、ゼキスはベルトを両手で掴むとスロットをたたんで縦に起こし、両方のメモリを引き抜くと代わって取り出した別のメモリをそれぞれに挿し入れた。

《リジエクト!》

《スファイア!》

右のスロットに排他的な毒々しい印象の深紅の『拒絶の記憶』のガイアメモリを、左側にどこまでも広がる珊瑚礁のような爽やかなアイスグリーンの『領域の記憶』のガイアメモリを装填し、スロット

を左右に振り払って展開するなりゼキスの姿は中心のセントラルパーテーションから左右それぞれ元の色に滲むように体色を変化させていった。

カーマインとアイスグリーンの『リジエクトスファイア』にフォームチェンジしたゼキスは、背中に形成された槍『スファイアステイカー』を引き抜き伸長展開させるとそれを真横の壁に突き刺した。

長く長く、壁に縦一文字を刻みながら落下速度を減じるゼキスの身体。

『……重力を拒絶する。』

やがて眩きと共に何もない足下の虚空を蹴り付けると、ゼキスの身体はそこから跳ね上がった。いった。

何度もそれを繰り返して縦孔を上昇するゼキスが見上げた先から、何やら巨大な岩塊が降ってくるのが見えた。

『忌々しい。ただのバカじゃなかったということか』

吐き捨てながらゼキスは虚空を蹴り続け、槍を振りかざしてその岩塊の雨に飛び込んでゆく。

「わあああああああ！？」

『ひゃっははははははは！ もっと泣き喚けよ！その方が素敵な絵になるからよ！』

美術館内の廊下を、順路の看板やポールを薙ぎ倒しながら必死の形相で逃げ回る瑞希とそれを追ってドロウ・ドーパントが悠々とした足取りで追跡していた。

「あっ！？」

ところが、この後に及んで後生大事に抱えていた巨大なファイルケースのせいでバランスを崩した瑞希は、廊下の曲がり角で盛大に転倒してしまった。

ファイルケースが開き、中から鮮やかな絵が描かれた紙が飛び出し辺りに散らばってしまう。

「ああ！？」

『追いついたぜ　　っ』

うつ伏せで散らばった作品に手を伸ばす瑞希の襟首を、ドーパントの右手が掴み軽々と持ち上げた。

『さあて。お前をどこに描き込んでやるうか……』  
辺りを眺め回してドロウ・ドーパントは舌なめずりするように言った。

『だいたい、美術館じゃあ高尚過ぎていけねえな。アレだ。お前、便所の落書きに変えてやるよ!』

言いながら、瑞希を掴み上げたまま歩き出したドーパントの背中を、突如痛烈な突撃が襲った。

『ツガツ!?!』

たまらず瑞希を離して吹き飛んでゆくドーパント。

床に投げ出された瑞希が見上げたそこには、先ほどドーパントが作った穴に落とされていったゼキスとか言う謎の二色怪人とは色違いの何者かが、槍を突き出した姿勢で立っていた。

『……無駄口を叩くなよ』

その声で、これがゼキスと同一の存在であると瑞希にも知れた。

『てめえええ!?!　あんだだけカマしてやったのに、なんで生きてんだよ!?!』

飛び起きたドロウ・ドーパントが「筆」を突きつけて絶叫する。

『ちっ、まともに殴り合ってたまるかよ!』

叫んだドーパントは、またも空中で「筆」を振り回し、滲み出した「色」で何かを描き始めた。

『こちらも、たいがい付き合いきれないな』  
仄暗い声音で言いながらゼキスが前進する。

その途上で瑞希の脇を通過する際、ゼキスの右足が床に散らばった絵を踏み越えていった。

「……あ……」

構わず突進するゼキスの前には、巨大な煉瓦の壁が出来ていた。じ

きに廊下を完全に塞ごうとしている。

『させるか』

その残りの隙間に滑り込み煉瓦の向こうに回り込んだゼキスは、またも床に描かれた穴に落ちていった。

『ひゃっはは！ バカを見ろよ！』

見事に罠に填めたドロウ・ドーパントが喝采をあげる。

だがその直後に穴からゼキスが飛び出し、槍がドーパントを打ち据えた。

『ッガッ！？』

『……真理亜。少し遊ぶよ。』

『悪い癖。でも、いいよ。』

二人の声でゼキスが会話し、槍を構え直すと起き上がったドーパントに踊りかかった。

『て、てめえええ！？ つがあああつ！？』

袈裟掛けに一撃、返して二撃。よろめいて後退するドーパントを追わずにスフィアステイカーの長いリーチで突撃を喰らわせる。

『がつ！？』

右半身の『拒絶の記憶』による反発の力場がドーパントを激しく吹き飛ばした。

『あああああああ！？』

廊下の端まで転がっていったドーパントは、しばらく床でもがいていたが、やがてふらふらと身を起こした。

『……はあ、はあ、……ふ、ふざけやがって……』

怨嗟をこぼすと、ドロウ・ドーパントはふらつきながらも脇の通路へと逃げ込んでゆく。

『ちっ。まだ動けたのか』

『不用意に間合いを広げるからでしょう？』

それを追って走るゼキスの中で、真理亜が鷲生を窘めた。

間を置かず曲がり角までやって来たゼキスの前には、何者もない長い廊下が広がっているのみ。

途中にはドアがあるものの、開閉の音は聞いていないし、廊下の長さはこの短時間で逃げきれぬ距離ではない。

ゼキスは注意深く廊下を歩き出した。

十中八九、罠だろう。ドロウ・ドーパントの能力の傾向はだいたい理解した。

大方、本来は存在する脇道に潜み、壁を描いて隠れているか、その逆かといったところだろう。

そう警戒して廊下を進むゼキスだが、突如背後で気配が膨らんだ。

『ひゃっはあ！ まあたバカ見やがった！』

振り向いたその先、この廊下の入り口付近にドロウ・ドーパントが現れていた。

『こつから先は本当は何もねえよ！ そこは、俺が壁に描いた絵の中の廊下だマヌケッ！』

ゼキスは慌てて周囲を見回し、中で驚生が臍を噛んだ。

この廊下自体が奴の描いた絵の中の世界だと言っのか？

『ちっ！？』

振り返り、全力で廊下の入り口へ走る。

だがそこにはドーパントが立ち塞がり、既にこの廊下を塗り潰し始めている。

『じゃあな！二色の変なやつ！』

ドロウ・ドーパントは嘲笑しながら壁を描き続け、この世界を塗り潰してしまった。

ゼキスは、絵の世界に閉じこめられた。

『さあーて！ これで邪魔者は今度こそ消えたしよ！ 次はお前の番だ！』

嘲りを吐きながら、ドロウ・ドーパントが瑞希の元へ戻ってくる。とつと逃げればいいものを、瑞希は先ほどの場所に座り込んでいた。

『……ナニしてんだおまえ。』

瑞希は、床に散らばった自分の絵のうち、無惨に足跡を付けられた絵の前で両手を付き呆然としていたのだ。

『チツ。 もうちよっとみっともなく泣き叫べよ』

吐き捨てたドロウ・ドーパントは、言った通りのことを実行すべく瑞希の元へ近付いていった。

『どうするの？驚生。』

ゼキスの中で、真理亜が問いかけた。

こうなつては、スフィアメモリの『領域の記憶』でも脱出は不可能だ。閉じこめられてしまつては、『領域の記憶』はその「外側」へ向かう力を発揮しない。

『アレを使うしかないよ。 いいよね？真理亜。』

驚生の問いに、しばし間を置いてからその声は応えた。

『……うん。 いいよ。』

ゼキスの両手がバツクルのロットを縦に畳んでメモリを引き抜くと、新たなメモリを取り出しそれぞれのロットに挿し入れた。

《デイセプト！》

《チャペル！》

右のロットにどこか不安を誘う紫の『欺瞞の記憶』のガイアメモリを、左側にはどこか静謐な雰囲気で清涼感溢れるアクアブルーの『礼拝堂の記憶』のガイアメモリを装填し、ロットを左右に振り払って展開するなりゼキスの姿は中心のセントラルパーテーションから左右それぞれ元の色に滲むように体色を変化させていった。

ヴィクトリアンモーヴとアクアブルーの『デイセプトチャペル』にフォームチェンジしたゼキスの左肩には、水色と紫で彩られた巨大な肩当てが装着されていた。流れるような紡錘形の半球が、二重に重なっているようにも見える、肘まで届く長大な肩当て。

だがゼキスは肩当てには触れずに無手のまま、塗り潰された壁に近づき身構えると、右の拳を引き絞った。

『欺瞞の記憶』が、この描かれた壁の「嘘」を見破り、『礼拝堂の

記憶』がこの不自然な世界の存在を浄化する！

『はあっ！』

驚生の氣勢と共に放たれた拳の一撃が、この閉塞された絵の世界を木っ端微塵に打ち砕いた。

突如の轟音に、ドロウ・ドーパントは慌てて振り向いた。

『まさか！？ ……ばかな』

先ほど塗り潰してやった壁が砕け散り、破片がドロドロのゲル状になって床に広がり、その跡に紫と水色に変色したゼキスが現れていた。

『……てめえ、てめえっ！？』

『そろそろ、仕舞いだ。』

ベルトのスロットを縦にたたんでメモリを引き抜き、代わって黄と白のメモリを装填し左右に振り払う。

《フォービドゥン！》

《イレギュラー！》

再びスターティングフォームである『フォービドゥンイレギュラー』にチェンジしたゼキスは、スロットをたたまぬまま左のスロットからイレギュラーメモリを引き抜き、それをベルトの右側面に設置されているマキシマムスロットに装填した。

《イレギュラー！ マキシマムドライブ！》

強制増幅器によって高速演算を施されたイレギュラーメモリから倍加したエネルギーがアングレットへと流入してゆく。

パワーを解放し出したゼキスの周囲の光景が揺らぎ、その周りだけが僅かに暗くなった。

『う、うわあああああ！？』

膨大なエネルギーの奔流に危険を感じたドロウ・ドーパントが、滅茶苦茶に空中を「筆」で撫で始める。

だが、泡を喰ったドーパントにはまともな描画ができないらしく、現れたのは、先が鋭い尖った何か。

とにかく武器になればなんでも良かったのか、現れた「尖った何か」を掴んでドロウ・ドーパントはそれを振り回して迎え討つ。

『……イレギュラーシャットダウン。』

眩き、周囲の光の進行すら禁止して闇を引きずり突進したゼキスは、ドーパントの突き出した武器を右手で打ち払い存在を禁じると、武器は呆気なく溶けて崩れ、無防備なドーパントの顔面をハニーエローの右手ががちりと掴んだ。

『禁止の記憶』を司る右手に掴まれ身動きすら禁止されたドーパントには最早、逃れる手段はない。

そして僅かに分離した左半身だけが「その場で」縦に一回転すると、背後を巡って振り下ろされてきた白い踵が動けぬドーパントを脳天から唐竹割りに貫いた。

閃光が、縦一文字に「E」の字を刻み付ける。

床に叩き付けられたドロウ・ドーパントはたちまち大爆発を起こし、爆炎がくすぶるその跡に、ガイアメモリ強制排除に伴う虚脱症によって目の下に深い隈を刻んだ相沢が膝を落として倒れ伏し、宙でバラバラに砕けたドロウメモリのなれの果てが床に散らばった。

あちこち駆け回った末、一同の姿はいま美術館のロビーの反対側、階段に囲まれた吹き抜けの下にあった。

倒れてなお砕けたメモリを求め手を伸ばす相沢の前に、メモリの残骸を踏み砕きながらゼキスが歩み寄った。

『答えてもらおうか。いったいどこでメモリを手に入れたのか。』  
そうして一步、一步と迫るゼキスに突如、握り拳大の黒い物体が襲いかかった。

『!?!?』

ゼキスの胸板を打ち周囲を飛び回るそれは、機械仕掛けのクワガタ

ムシのように見えた。

二度、三度と小さな体躯でゼキスの胸郭を弾いて押し退けると身を翻し、護るように倒れる相沢の上で旋回し出した。

「そこまでだ。白衣」

投げかけられた声に振り向けば、階段の途中に何かを投げ放った形の手を帽子に遣り、気取った仕草で鍔の縁をなぞる男の姿があった。鳴海探偵事務所の、左 翔太郎。

ただし、気取ったポーズの割にぜいはあと荒く息をついている。どうやら全力疾走でここまで来たらしい。

『探偵さんか。』

その姿を見上げ、呼びかけ返した。

翔太郎は、スタックフォンに容疑者の護衛を命じ、この場の惨状を見回して痛ましげに眉をしかめ固く目をつぶった。

「……………白衣。 お前な……………」

そして、烈火のごとく怒号を放つ。

「風都を泣かすにも程があんだろ！！」

激しい怒りを身に纏い、踏み抜く勢いで階段を降りてくる。

「……………街の人が壁画にされる事件の調査してたらよ。容疑者の身辺に名前なのばらねえ人間がいたんだよ。」

その途上で語りながら、翔太郎はやがて地階に降り立った。

「嫉妬の対象になった人間の隣に、名前がわかんねえ女がいた！自分にまつわる情報の伝播を禁止できるやつを、俺は二人しか知らねえ！……………真理亜さん。 あんた、相沢の嫉妬心を煽る為に、ライブルであるそっちの瀬能 瑞希を過剰に賞賛しただろ！？」

「……………え？」

そこで、足跡のついた絵を持ってうなだれていた瑞希が呆然とした顔で翔太郎を見上げた。

翔太郎は、痛みを堪えるような厳しい顔つきでなおも言い募る。

「白衣！ お前らは、相沢の心の闇を突き、相沢にガイアメモリを

買わせるよう仕向けたんだ！違うか！」

未だ黙したまま立つゼキスに、びしりと指を突きつけた。

「これは白衣、お前の指示かよ。それとも、真理亜さんの意志か！？」

手を振って問い詰める翔太郎の前で、ゼキスは両手でバックルのスロットを縦にたたむと二本のメモリを引き抜き変身を解除した。

無数の薄氷が割れるような音を立てて崩れ消滅してゆく強化外骨格のあとに、ベルトを腹に装着したままの真理亜が現れた。

「まり、あ、さん……」

座り込んだ瀬能 瑞希がぼんやりと呟くが、真理亜は反応を示さなかった。

その暗い目は翔太郎を見つめ、やがて薄い唇を開く。

「おもしろい推理ですけど、そんな遠回りなことをしても、嫉妬した人がガイアメモリを買えるとも限らないんじゃないですか？」

嘲るように小首を傾げ。

「そもそも、そう簡単に手に入る物でもありませんし。」

「これはウチの相棒の推理だけだな」

翔太郎も、厳しい顔のまま即座に言い返した。

「たまたま俺たちが絡んだ事件のいくつかで名前の上がらねえ関係者って存在が出てきた事が何度かあった。あんたら。手当たり次第にあちこちで似た様な事してんのか！？」

「ふっ。」

真理亜がおかしそうに溜め息を吐いた。片手を振り。

「……数を打てば、いつかどれかは当たるでしょう？ こんなふう」

「真理亜さん、あんた……！？」

怒りに顔色をどす黒くした翔太郎がつかつかと真理亜に歩み寄った。

「もうやめろ！こんな真似は！白衣！お前もだ！」

真理亜とその中にいる白衣に叫びながら、翔太郎が白くて細い手首を掴んだ。

が、直後に翔太郎は反対側に投げ飛ばされた。

「!？」

辛うじて受け身を取ったが、翔太郎は己の勘違いを思い知った。

見かけは少女でも、この「水無 真理亜」は原理的にはドーパントと同様の存在なのだ。

「真理亜さん、あなた……」

「以前にも鷺生が言った通りです。」

翔太郎を振り払った体勢のまま、真理亜はまるで冷たいガラスのような無機質な眼差しで見据えて告げた。

「わたしたちは諦めません。必ずわたしを死なせたやつらに復讐します。」

そして真理亜はくるりと踵を返し、美術館の玄関へと歩き出した。

「あなたが来てくれたのなら、その人は預けます。鷺生の依頼、続けてくれるのでしょうか？」

「ああ。だから真理亜さん、もうこんな事はやめろ！なににも街を泣かすことはないだろう!？」

真理亜の背中に応え、重ねて翔太郎は絶叫する。

だが、その背中には止まらない。

「よろしく願いますね。」

言って、真理亜は立ち去っていった。

瑞希は足跡の付いた絵を抱きしめて泣いていた。

結局、真理亜は今日、一度たりと瑞希と目を合わせなかった。

あんなに喜んでくれた瑞希の絵を地面のアリののように無作為に踏んで、何も言わなかった。

あの数日間はいったいなんだったのか。

瑞希は大声で泣き叫んだ。

ドロウ・ドーパントのメモリブレイクと同時にドロウメモリの干渉は消え、壁画にされていた人々は元の姿に戻った。だが、真理亜も鷺生もそれを一顧だにすることはなかった。

「おそおおおいつ！」

夕刻。自転車便『シルフィード』の本社に戻ってきた、自転車に跨った鷺生をあずみのクリップボードのフルスイングが出迎えた。

「ぶげっ！？」

あずみとのすれ違いざまにサマーソルトターンをさせられ股下から自転車だけがすっば抜けてゆく。

クリップボードを振り切った姿勢のあずみの背後で鷺生が逆さまに落下し、遠くでへろへろと蛇行した無人の自転車が今、倒れた。

「あんたね！？ 犬だって呼べばすぐ帰ってくるわよ！？ 出ていく度になかなか戻らないって、あんた犬以下！？」

「いやあ。風はいつだって自由だよ？」

逆さまのまま鷺生が朗らかに応えた。

「あんたは風じゃなくて、ウチの社員！ とつとつ今日の分の報告をまとめて！」

つたく、とあずみが憤懣遣る方ない様子で地面を踏みつけながら社屋に戻ってゆく。

腰と頭を押さえながら、鷺生も立ち上がった。

倒れた自転車を起こして定位置に戻し、オフィスに向かう道すがら、打たれた額をさすりながら、痣になってないかとその壁にかかっていた鏡を覗きこんだ。

その時、鏡に映る鷺生の顔に陰惨な笑みが浮かび上がった。

t o n e x t   f i l e . . .

File・01 Dの肖像/裏切りのキス(後書き)

思いのほか非道なダークヒーローになってしまいました。大丈夫かなこれ。

タイトルに「仮面ライダー ゼキス」と謳いつつも、物語では「仮面ライダーのなんたるか」にはまだ触れていません。

これからどうなるのかは……まだぼんやりしたイメージ段階ですが。

そして、つらつと手持ちの六種のガイアメモリを明かしました。

なんでこんな抽象的なのかなのにも、一応屁理屈があります。またいずれ。

それにしても、ドーパントの設定はいろいろ仕掛けの幅が広げられて楽しい。

番組中盤からもう「新手的 使いかッ!!」っていう感じになってきて、その巧妙な「なんでもあり感」も大好きでした。

それではまた。

「うおおおおおおお！？」

もしも絵に描くなら三日月三つで表現できそうなチエシヤ猫めいたニヤケ面の亜樹子が突き出した依頼書を見て、翔太郎は絶叫した。

「うっおおおおおおお！？」

薄暗い地下水路の中を、腕脚をモノ凄しい勢いで振り回して走りながら翔太郎が必死の形相で絶叫した。

「うっおおおおおおお！？」

しゃがんだ状態ながら、両手と両足で上下の「顎」に挟まれながらもとい、押さえながら、地下道を疾走する巨大W二の口の中で翔太郎が半狂乱で絶叫していた。

既に腰にはダブルドライバーが装着されているが、両手が塞がっているためメモリが取り出せない。

「おおおおおいッ！？ ふい、ふい、フィリッパー！ タスケテー！？」

いま迂闊に手を離せば、そのまま嘔み潰されてしまうだろう。

飛び出そうにも飛び出せない膠着状態に、翔太郎はたまらずドライバーを通じて意識を繋いでいる事務所のフィリップに助けを求めるが。

『うるさいな翔太郎。今「クロコダイル」の閲覧で忙しいんだ。』  
なぜかフィリップの不機嫌な応えが帰ってきた。

「フザケンなてめえええ！？ 死ぬ！もう死ぬ！」

『ああ。W二の口は、閉じる力は強いけど、開ける力はそうでもないそうだよ。だから捕まえる時は、背後から近付いて上から口を押さ』

「だからなんだってんだこらー！」



そして起こる衝突。

カーリングさながらに、ぶつかった自動車同士がそれぞれ反対側に跳ね飛ばされてはそのまま滑ってゆき、あるものは壁に激突し、あるものは別の車にぶつかつた。

「あー！ー！ー！ー！？」

そして未だ滑り続ける男の方にも、自動車が数台まっしぐらに滑走して迫ってきた。

「……で、脚をぼつきり折りました、と。」

ギプスでがちがちに固められた片足を釣り上げて白いベッドに横たわる鷺生の横で、あずみが怒りを堪えるようにつつむいて絞り出すように宣った。

「風都の自由な風の一生の不覚だねっ！」

ぺし、と自分の頭を叩いて朗らかに笑う鷺生にとつとあずみが激発した。

「あんたは一生不覚だらけでしょうがっ！」

だがさすがに振り上げたクリップボードは止めた。

「大丈夫大丈夫。片足でも自転車は漕げるから。」

「だからなんだってのよ！？ 目的地に着いても配達ができないでしょ！？」

「あー。」

鷺生の心底残念そうな応えに、あずみはがっくりと肩を落として顔を覆った。

「……ああ……いつそバカの方が治れば良かったのに……」

死ぬことで完治する病名を出して呻く。

あの交差点での謎のスリップ現象に因る衝突事故は、合計二十数台

にのぼる車を巻き込んだ。

その直中にいた驚生は結局二台の車の激突に挟まれるも、片足一本の骨折だけで済んだという幸運に恵まれた。

「まあとにかく生きてて良かったし、『シルフィード』最速の脚が抜けた穴はなんとか埋めるから、あんたはしつかり養生して回復に勤めなさい。いいわね!？」

「らーじゃ！ そよ風らしく、せいぜいのんびりゆっくり配達してくれたまえとみんなに伝えといてくれ!」

「膝と足首の間にもうひとつ関節を作りたくなかったら黙って寝てなさいっ!」

最後に一言吼えて、あずみは病室から出ていった。

……せい。……せい。

「……あ、亜樹子…… ペット探しにも、自ずと、限度ってモンが、あんだろ……」

地面に四つん這いで突っ伏した翔太郎が息も絶え絶えに訴える横を、巨大なワニを納めた風都動物園のトラックと、無許可でワニを飼った上に捨てた男が警官に連れられて通り過ぎていった。

結局何をどうしてこうなったのか自分でも良く覚えていないが、今だったら「ハードボイルド」に加えて「クロコダイル・ダンディー」にだってなれそうな気がする。

「良かったじゃない。たなぼた式にでも風都の平和が守られて。」

「よーシヨータロー。ゴチソウサマ!」

さらに連絡を受けた刃野刑事が翔太郎の肩を叩いて手柄の礼を告げ去ってゆく。

「……俺の平和はダレが守ってくれんだよ……」

「あー!? 好きで探偵稼業に首突っ込んでるクセに今さらなに言  
つてんのよー!?」

ぼやいた翔太郎の横で腰に手を当て仁王立ちした亜樹子が尊大に見  
下ろしてくる。

「だいたい、仕事を選び好みしてられる状況じゃないんですからね  
!ウチの事務所は!」

「その依頼者が連れて行かれちゃったじゃねーかよ!?」  
「たまらず跳び起きた翔太郎が走り去るパトカーを指さして怒鳴り返  
した。」

「どーすんだよ依頼料は!? あのワニに關しちゃ今回死にそーな  
目に遭つといてタダ働きじゃねーか!?」

「あああわたし聞いてないいいいい!?」  
頭を抱えた亜樹子が慌ててパトカーを追いかけてゆく。

「……………つたく……………」

まってー、などと叫んで必死に追いつがる亜樹子の後ろ姿を眺め、  
翔太郎は長い長い溜め息を吐いた。

ビルの空きテナントに偽装した連絡用セーフハウスの扉が開いた音  
に、部屋の中央に立っていた須藤 霧彦がいつもの笑顔のまま振り  
向いた。

「やはりあなたが来ましたか。 裏神さん。」

入室してきた大柄な黒スーツの男、裏神 庵慈は放埒な髪の下、ま  
るで鑿一本で削り出したかのような彫りの深い顔に厳つい笑みを浮  
かべた。

こうして改めて見ても、老成した中年にも若々しい壮年にも見える  
不思議な雰囲気纏う裏神に、霧彦は内心で呆れ半分に感嘆してい  
た。

「ふっふ。お前の担当地区の後任を任せてもらえるとは光栄だな。須藤。」

まるでオペラ俳優でも務まりそうな深みのある声で裏神が笑みを含んで応えた。

「……いや、園咲と呼ぶべきかな？」

「いいえ。届け出がまだですのでね。」

軽く片手を振る霧彦に、裏神は肩を揺すって笑った。

「ふっふ。こつも早く園咲に入り込むとは、辣腕は相変わらずのようだな。」

「いいえ。全てはお客様のおかげですよ。」

胸に手を当て謙遜して見せる。

「どういう訳か、特にこの一年ほど私の地区でガイアメモリをお求めになるお客様が増えまして。」

「ふっふ。面白い奴がいるそうじゃあないか。」

「そうですね。少々、アフターサービスには余りそうな案件ですが。」

「いいや。それだけではないぞ。」

「？」

相変わらず面白がるような顔の裏神に、霧彦は僅かに小首を傾げて見せた。

「まあ、後のことは俺に任せておけ。安心しろ。お前が担当していた地区の業績にドロは塗らん。」

「ええ。あなたのことですから、心配はしていませんよ。それじやあ、これを」

言って、引き継ぎ資料を収めたファイルケースを裏神に手渡し、霧彦は玄関ドアに向かった。

ところで立ち止まり、僅かに振り向いた。

「ああそう。一応同僚のよしみでの忠告ですが。ここでの「研究」は、少々控えた方がいいですよ？」

いつもの屈託のない笑顔で告げた霧彦に、裏神は彫りの深い顔を擽

猛な笑みの形に歪めたのみだった。

「はい、じゃあ持っていけますねー」

ベッドに据え付けられたテーブルの上から空になった昼食の弁当を下げてゆく女性看護師に、鷺生は頬をいっぱいに膨らませたまま咀嚼しながらうなずいて応えた。

「あら。ごはんつぶ、付いてますよ？」

笑みを浮かべて自らの口元を指さす看護師の動作に、鷺生は自分の口元に手を遣った。

「……ああ、すみません」

笑いながら立ち去ってゆく看護師に礼を告げ、取り切れない口元の汚れを確認する為に鷺生は傍らの棚の引き出しをまさぐって手鏡をひっぱり出し正面にかざした。

「」  
自分の口元を改めて視認しながら、付いていた飯粒とソースを拭い取ってゆく。

その動作の途上、なんとなく鏡の中の自分と目が合い、鷺生は身動きを止めた。

「白衣さ〜ん。具合はどうですか〜」

回診に訪れた医師がドアを引き開けて見たものは。

空のベッドと開け放たれた窓、風にたなびく白いカーテンという無人の部屋の有様であった。

鷺生の姿は、どこにもない。

「……まったく！どこのどいつかしら！鷺生のこと傷付けたのは！」  
眉を急角度に釣り上げ、どこどかと踏み抜く勢いで水無 真理亜は

街中を歩いていた。  
エプロンドレスにスカーフを巻き付けた少女の後ろ姿が街の雑踏に  
紛れて消えていった。

「……おい。」

風都警察署の留置場に拘置された男は、呼びかけられ そちらをの  
ろのろと見上げた。  
鉄格子の向こうに立ってこちらを見下ろしていたのは、見覚えのあ  
る男だった。

初老とも壮年ともつかない不思議な印象の男は、彫りの深い顔に何  
か面白がるような笑みを浮かべて男を見つめていた。

その笑顔はなぜか見る者に安堵を覚えさせ、その漆黒のスーツと相  
まって、まるで聖職者のような雰囲気醸し出している。

「……あ、あんた……」

「落し物だぞ。」

呆けていた所に足下に投げ込まれた物を見て、男は喫驚した。

化石のような有機的な形状の直方体にディスプレイと金属端子を埋  
め込んだガジェット。ガイアメモリ。

ただし、そのガイアメモリは通常の物と異なり、ガイアメモリを中  
ほどで切ったような長さ・形状の延長器具を接続して全長を一・五  
倍ほど伸長させていた。

これを売り渡した当のこの黒スーツの男は「試供品のアダプターだ」  
と言っていた。

おかげで自分はえらい目に遭ったのだが。

「こ、これ、どうして……?」

「なに。アフターサービスの一環だ。買って置いて、一度も使わず  
に終わるなどあんまりだろう?」

言われて、黒スーツの男が関係者以外立ち入り禁止のこの留置場まで入ってきている異常に気が付いた。

「……で、でもあんた、どうやってここまで……？」

「ふっふ。細かいことは気にするな。」

慌ててガイアメモリを拾い上げた男に、黒スーツの男は笑みを含んで応える。

セールスマンを名乗る割りに非常に横柄な態度だが、不思議と気にならなかった。

相変わらずの自信に満ちたその笑顔が、男から不安を取り除いてゆく。

「言っただろう。アフターサービスの一環だと。今度は落とすんじゃないぞ。」

それだけを言っただけで、黒スーツの男は立ち去っていった。

それを見送った男は、手に握りしめたガイアメモリを見下ろし、ひきつった笑みを浮かべた。

刃野刑事に電話で呼び出された翔太郎は、自分も同行すると主張する亜樹子を伴い国道と交わる風都で最も大きな交差点にやって来た。もう既に、噂で聞いていた。ここで何が起こったのか。

「ジンさん！ちわす！」

「……おお。ショータロー。」

湾曲したツボ押し器を肩に担いだ刃野刑事が振り向いた。

相変わらず何を考えているのか読みにくい眉根を寄せた苦笑顔で、ひよこひよここと翔太郎に寄ってくる。

「なんか、交通事故があつたって……」

「ああ。聞いてんのか。ならハナシは早えわな。」

言いながら横に並び、さりげなく手元に封筒を押しつけてきた。

「二十六台にのぼる衝突事故だ。幸い死者だけは出てねえ。」  
歩道の角から広い交差点を眺めて刃野刑事がぼやくように語り始める。

封筒から取り出した現場検証の写真の束を、一枚ずつめくって隣の亜樹子に差し出しながら翔太郎も交差点を眺め遣った。

今はもう事故車両のほとんどが片付けられ、作業スペースのために設置された臨時のガードレールで車線を狭めつつも交通は普通に流れているようだ。

写真に写っていたのは、事故直後のこの交差点の惨状。

「高速道路じゃあるめえし、一般道で二十台が玉突きだなんて有り得ねえだろ」

「……！」

刃野刑事が翔太郎をアテにする時は、十中八九異常事態が想定される場合だ。

そして、それこそが翔太郎の専門であり本領である。

写真に写された光景は、どれも半壊した自動車が攔座しており、そして奇妙なことにどの車も向きがバラバラで、あちこちに散らばっている。

玉突き事故や衝突なら、車同士はほとんど同じ方を向いているか向き合つかのどちらかのはずだ。

「聞けば、運転手の全員が全員、突然タイヤが滑って制御不能になったと口をそろえてほざきやがる。まあ確かに壁に横から突っ込んだ車の足下にはなぜかタイヤの跡がねえ。つつつか、二十台もいてブレーキ痕が一個もねえときた。」

「ブレーキ根？ ブレーキかけるぞ！っていう根性？」

「お前は黙ってる。」

途端にむくれる亜樹子から写真の束を取り上げて封筒に戻す。

「……ジンさん。調べてみます。」

「おう。頼んだぜ」

挨拶代わりに振られたツボ押し器に応え、翔太郎はその場から立ち

去っていった。

『……つつう訳だよ。まずこの交通事故について検索してくれ。』  
「わかったよ。翔太郎。」

鳴海探偵事務所の隠し部屋、地下ガレージで連絡を受けたフィリップは携帯電話を持ったまま立ち上がり、本を持った片腕を僅かに広げると虚空を見上げまぶたを閉じた。

「……さあ。ひとつめのキーワードは？」

事故現場の交差点名、日付と時刻、などと携帯電話から告げられる翔太郎がもたらした単語を元に、『地球の本棚』に意識を接続したフィリップの前で無数の本棚が次々と入り乱れて配置を換えその数を減じてゆく。

「……あつたよ。翔太郎、よく聞いて。」

『おつ』

そしてフィリップはこの奇妙な交通事故の概要の説明を始めた。滑る要素が何もないアスファルトの上で起こった謎のスリップ現象と、巻き込まれた二十六台もの自動車。

まず間違いなくドーパントの仕業だろうということは翔太郎と意見が一致した。まだ何の『地球の記憶』かは定かではないが。

その交差点に進入した自動車の車種を順番に告げ、続いてフィリップは僅かに間を置いてから口を開いた。

「……それでね、翔太郎。また、あつたんだ。」

『あ？なにがだ』

「この交通事故にはもう一人被害者がいる。実はこの事故には自転車一台巻き込まれているんだが、その自転車に乗っていた人物の情報が、『地球の本棚』には入っていない。」

『……！』

翔太郎の、息を飲む音が聞こえてくる。

「誰も乗っていない自転車が交差点に進入できる訳がない。翔太郎、これは」

『ああそつだ。白衣がそこにいたんだ!』

ここ最近頻発していた「『地球の本棚』の検索に出てこない空白の関係者」という要素。

自分にまつわる情報の伝播を禁止できる復讐鬼の新たな所在の情報に、二人の意気が上がった。

「……ふうん。そんな事があつたんだ。」

三方をビルに囲まれた路地裏で、真理亜はクリアブルーのゴーグルが生えた巨大なヘッドホンを頭に被って耳目を覆い、片手に楕円形の機械を持って聴こえてきた内容にうなずいていた。

その手の機械にはハートマークを上下に逆さに繋げてアレンジされた「SYMPATHY」の「S」の頭文字がディスプレイに刻まれたガイアメモリが装填されている。

「驚生を傷つける奴は、絶対に許さないんだから。」

それから、邪魔をする奴もね。

呟き、ヘッドホンをはずして手元の機械ともどもまとめてたたんだ真理亜は、行動方針を検討しながら小走りで駆け出してゆく。

組み合わせられた機械は真理亜の手からぽいと放り出されると、細かく部品が移動して機械仕掛けのウサギに変形し、華麗に着地すると真理亜のあとを追って跳ねていった。

## File・02 銀盤を舞うF/W二の涙症候群（後書き）

仮面ライダー XXまとめ@Wiki

メモリガジェット

・パピリオフォン

パピリオメモリを挿入するとアゲハチョウ型のライブモードとなる黄色い携帯電話型ガジェット。ディスプレイ部とキーパッド部がちょうどつがいを軸に翅になるというダイナミックな設計。ギジメモリが腹部に、メモリボックスが胸部・頭部にあたる形で変形する。

・ラビットポッド

ラビットメモリを挿入するとウサギ型のライブモードとなる青いサウンドプレーヤー。「シンパシーメモリ」の専用ドライブユニットでもある。

ガイアメモリ

・シンパシーメモリ（S/青）

「共感の記憶」を宿したガイアメモリ。これは変身には使用されず、もっぱら情報収集のみに活用される。

またこれを挿すことでもラビットポッドをライブモードに移行させることができ、その「共感」の機能によって、真理亜の思考を読み取らせ意のままに操ることができる。

もうお気付きの方もおられるかと思いますが、こちらにも拍手ボタンを設置致しました。

「読んだよー」のサインにぼちりとひとつ押しして頂けると励みになります。よろしくお願ひします。

主人公たちのえげつなさに、いくつか反応を頂きまして本当にあり

がたいところでございます。

ただ、作者としましても一応ヒーロー物を描くつもりで書いております。よろしければ、今後の変遷を見守って頂けたらなあと願う次第であります。

私は将来を有望視されていたフィギュアスケート選手だった。大きな大会にも優勝して、いずれはオリンピックを目指していた。なのに。

私のその夢は、ある日あっさりと挫かれた。交通事故。

トラック運転手の居眠りなどと言う下らない失態のせいで、私の輝かしい夢は儚い砂絵のように掻き消されてしまったのだ。

全身を激しく打った。特に両足の複雑骨折が酷かった。折れた骨は、どんなに困難でもいずれは繋がる。

私も懸命にリハビリを繰り返した。

だけど、頭部に受けた衝撃はより深刻なダメージを根深く残しており、神経系の障害は私からフィギュアに不可欠な精密なバランス感覚を奪い去った。

骨折や傷が完治した今となっては日常生活に支障はない。階段も普通に登ったり降りたりできる。

でも、もう高度なバランス感覚を要するフィギュアスケートの技はできない。

できなくなってしまったのだ。

私は暗闇の帳を降ろされた人生に絶望した。

「キーワードを追加。「交通事故被害者」、「入院患者」。」  
純白の広大無辺の空間に佇むフィリップの周りで、書籍を満載にした無数の本棚が迅速に縦横に入り乱れて配置を入れ替えその数を減

じてゆく。

やがて数冊の本が宙に取り残され、それらも次々と吹き飛んで消えてゆき、フィリップの目の前には一冊の本だけが残された。

「……ビンゴ。」

人差し指を突き出して、フィリップはその本に歩み寄り手に取ると、『地球の本棚』から意識を復帰させた。

「翔太郎。やはりあったよ。」

事務所のガレージで、全編白紙のハードカバーを広げながら携帯電話に語りかける。

「今回の交通事故の被害者を一括して受け入れた風都総合病院の入院患者の中に、一人だけ『地球の本棚』に名前の上がない人物がいた。白衣 鷺生は確実に入院するほどの怪我を負っている。」

「おっしやあ！さすがだフィリップ！」  
「例え検索を禁止されていようと、「検索に係らないという事実」だけは消せないからね」

電話の向こうの相棒の喝采に、不敵な笑みを浮かべる。

『よおし！さっそく風都総合病院に行つてだなあ、今度こそとっ捕まえてじっくり話ができそうじゃねえか』

「いや、待つて、翔太郎。」

『あ？』

急ぐ相棒に、眉をしかめて追補事項を告げる。

「この患者は、実はすぐに病室から姿を消してしまつたようだ。」

『あ？ だつて、入院するほどの怪我だろ？そんならどうやって病院から抜け出せるんだ？』

「わからないよ。例えドーパントといえど、素体となった人間の身体的条件を全て無視できるとも限らない。けど、「ゼキス」のシステムは未知数だ。」

ガレージの金網のフロアを歩きながら、フィリップは宥めるように本をかざして言い募つた。

「既に病院から警察に搜索依頼が行っているはずだよ。翔太郎。」

風都署に行ってくれ。捜索願いの情報をキーワードに加えれば、白衣 鷲生を追跡できるはずだ。」

『分かったぜ、相棒』

「はあ？ おたく、ナニ言ってるんですか？」

受話器から聞こえてきた言葉に、刃野刑事はまず相手の正気を疑った。

さすがに悪ふざけとしか思えず、口調もつい嘲りの色を含んでしま

う。

「あんな、人間を丸飲みにできそうなくらいデカかったでしょう。

それが、どうやりやそんな犬猫くらいに小さくなるんで？」

向かいのデスクに座っていた部下の真倉刑事が、刃野の語った内容に怪訝顔で見上げてくる。

今の遣り取りで、真倉にも用件の内容が見当付いたのだろう。

だが、そんなことある訳ないではないか。

先頃、翔太郎が命からがら捕獲したあの巨大ワニが犬猫サイズにまで縮まったなど。

「動物の世話に関しちゃ、この風都にやおたくントコの動物園以上のところはないでしょう？ その動物園がワニ一匹閉じこめておけないだなんて大問題でしょう？ 事は違法飼育よりも重大ですよ？」

「はあ？ そりゃ自分とこの不始末にしたくないのは分かりますがねえ、人喰いワニが再び街に放された事実は変わらんですよ！？ とにかく、これからワニの搜索と、そちらの檻の現場検証に伺いますから、ワニの檻とその周りには触らないでおいってください！」

言って、がちやりと受話器を置いた。

「おい真倉。ワニ探しの人員を集めろや。俺はこれから動物園に」  
立ち上がり、ツボ圧し器を振って指示していたところでこの風都署

の屋内のどこからか激しい喧噪が聞こえてきたのに気付き、刃野と真倉は部屋の出入り口を振り向いた。

「……………なんだあ？」

がしゃん！

白昼の風都の大通りの交差点で巨大な破砕音が鳴り響き、通りを歩いていた人々がそれを振り返り覗き見てざわめき合っていた。

一台の自動車が、歩道を越えてその店舗に突っ込んでいたのだ。現場の近くにいた者が慌てて携帯電話を取り出し、ある者はカメラ機能で撮影し、ある者は通報しようとしている。

ところが、その交差点に進入してきた後続の車が次々とブレーキ音も立てず無音のまま道路から外れた方角へ横滑りに滑り込んできたのを見て人々は慌てて逃げ惑った。

立て続けに巻き起こる激突音。

そこに一羽の鳥が舞い降りて、電柱の上に着地した。

紅茶色の身体が陽の光を照り返して金属色の輝きを放つそれは、機械仕掛けの鳥だった。

それも、丸みを帯びた身体つきをしており、ふたつの巨大なレンズを頭部に持ったその形状は、まるでフクロウのよう。

そのフクロウは、今も自動車を巻き込み続ける交差点の惨状をつぶさに見つめていた。

「……………これね。」

黄色い携帯電話形態となったパピリオフォンのディスプレイに映るその惨状を、真理亜は眉を急角度に釣り上げて睨みつけていた。搜索に飛ばしたデジタルビデオカメラ型ガジェット「オウルムーバ

「から送られてきたリアルタイム映像は、まさしく驚生の身に降り懸かった不可解な事故と同一の現象であった。盗み聞きした例のハードボイルド気取りの探偵が見聞きした事故の概要とも一致する。

否。事故ではない。

このような、通常の物理法則では有り得ない事態は、ドーパントの仕業のほかない。

ならば、この付近に異常を引き起こしたドーパントが潜んでいるはず。

真理亜はパピリオフォンの方向キーを操作し、未だ車が激突している事故現場にいるオウルムバーの首を左右に旋回させた。

廊下に飛び出した刃野と真倉が見たものは、この風都署内の留置場方面の通路から慌ただしく駆けてくる署員たちと、それを追ってくる人間を丸飲みにできそうなほど巨大なワニの顔であった。

「「ひっ！？」

思わず竦み上がる刃野と真倉。

それもただのワニではない。巨大なワニの首から人間大の手足が生えた異形だったのだ。

首のあとに続くはずのワニの胴体はない。

「「っひいひいひいひいひい！？」

刃野と真倉は悲鳴をあげて我先にと逃げ出した。

「ジンさん！」

そこに、逃げ惑う署員の群を掻き分けて翔太郎と亜樹子が駆け込んできた。

「おお！？ ショータロー！？」

真倉の背中を押し遣って先に行かせ、刃野は翔太郎の肩を掴んだ。

「ジンさん！？　なにがあつたんスか？この状況は」

「い、い、いいからオメエも早く逃げるおおお！？」

「……………！？」

冷静さを失い狂乱している刃野と玄関に駆け戻るフリをしながら、翔太郎は適当なところで刃野から離れ、逃げ惑う人々に紛れて風都署内に戻っていった。

「ちよつと！？　翔太郎くん！？」

「おめえはジンさんと一緒に外へ出てろ。刑事ですら泡を喰う相手なんて、そういねえだろ？」

こと、この風都においては。

翔太郎の言葉のニュアンスを察した亜樹子はうなずくと、振り向いて駆け出していった。

喧噪が遠ざかる風都署内の廊下を小走りで駆け抜ける亜樹子は、ふと途中の部屋に気付いて立ち止まり、その無人の部屋を覗き込んだ。見覚えのあるそこは、刃野刑事のデスクがある仕事部屋。

「……………」

なんとなく興味を引かれて部屋に入る。

刑事部屋の机は非常に乱雑で、積み上げるばかりで整理整頓を知らない翔太郎の机の有様と重なり亜樹子は渋面になった。

「……………なんで男って片付けるってことをしないのかな」

口をへの字にひん曲げて呟く。

そして見るともなしに見ていた机の上に、「搜索対象者一覧」なる文字を書かれたファイルを発見した亜樹子は。

とびつきり邪悪な笑みを浮かべた。

『……………つと。こんなところで、どうかナ？』

「さすがだよアキちゃん！アキちゃんの探偵としての能力は、翔太郎を遙かに凌駕しているね！」  
人として大切なあれこれを遙かに欠落させた二人の喝采が、人知れず響き渡っていた。

やがて動くものがなくなり、閑散とした署内はやけに物音が響く。重たく柔らかいものがリノリウムの廊下を定期的に打つ音の主が、やがて翔太郎が待ち構える通路に姿を現した。

「……げ。」

そいつの姿は翔太郎のトラウマを刺激した。

人を丸飲みにできそうな巨大なワニの頭。

ワニの首だけが、通路から歩いて出てきたのだ。

だが、翔太郎が気にしたのは先頃の巨大ワニ捕獲事件のことだけではない。

「手足が生えた巨獣の首」というモチーフは、夏に起きた幼馴染みの悲しい事件をも思い起こさせたのだ。

「……イヤなカツコに変身しやがったなあ……」

ハットに手を遣り、呻く。

翔太郎の存在に気付いた巨大ワニの首が、その長大な顎を上下に開き咆哮を上げた。

「うおつと。浸ってる場合じゃなかったな。……フィリップ！」

取り出したダブルライバーを腹に押し当て飛び出したバンドで結束させて装着し、相棒に呼びかける。

『出番かい？翔太郎。』

「ドーパントだ。行くぞ！」

ドライバーの装着と同時に意識を接続させた相棒に告げ、翔太郎と、事務所にいるフィリップが同時にメモリを抜き出した。

《サイクロン!》

《ジョーカー!》

スタータースイッチによりメモリを起動させ、二人は同時にメモリを持つ手を各々の方向に振り切った。

「『変身!』」

そしてフリリップ自身のドライバーに挿したサイクロンメモリが翔太郎のベルトのスロットに転送されてきたところで、それを一段押し込み、続いて翔太郎の持つジョーカーメモリを逆手に持ち代えてベルトの左スロットに挿し入れる。

待機音が響く中、交差した両手でバックルのスロットを外側へ展開した。

《サイクロン!》

《ジョーカー!》

赤のスロットが連動して傾いて「W」の形を成し、右左それぞれのガイアウィスパーが各々の記憶を告げると、どこか気取った角度で両掌を左右に振り切った翔太郎の身体を迅速に変化させてゆく。

身体を中心軸にセントラルパーテーションを構成しながら、左右それぞれ異なる色の強化外骨格が覆ってゆく。

右が若草色に、左が漆黒に。

最後に頭部まで装甲が覆い尽くし、「W」を彷彿させる突起が額に現れ、深紅のホークファインダーがざらりと輝き変化が完了した。

『『さあ。お前の罪を数えろ!』』

右手を振り切り、スナップを効かせた左手の指先をドーパントに突きつける。

事情は知らないが、人々を恐怖に陥れる脅威の権化を放ってはおけない。

ガイアメモリは使用者をも蝕む。

誰だか知らないが、ガイアメモリを使用すること以上の罪を重ねさせる訳にはいかないのだ。

『おらあああああ!』

疾く駆け出し、手前で跳躍して拳を振り絞りドーパントに踊りかか  
る。

『ーーーーッ!』

だが目の前で巨大な顎を全開に開かれてダブルはたたらを踏んで立  
ち止まり、突き出しかけた拳を引き戻した。

その前の空間を、巨大な顎が凄まじい音を立てて閉じ合わせた。

『うわあつぶね!?!』

手を引くのが僅かに遅れていたら、手首を噛み砕かれていたことだ  
ろう。

ダブルの強化外骨格がどれほどの強度か、自分の身で測定してみた  
いなどとは翔太郎も思わない。

距離を取り、横や背後を取れないかとフットワークでドーパントの  
周囲を伺うが、その巨大な顎はダブルから逸れることはない。

これが本物の巨大ワニだったなら。旋回に不利な胴体があれば背後  
への回り込みようもあつただろうが、このドーパントはそうはいか  
ない。

本物のワニにはなかった小回りを得たワニの顎がこれほど危険なも  
のだったとは。

翔太郎も、単純ゆえに強力な力に対し、正直攻めあぐねていた。

身体を壊して、初めて自分にフィギュアスケート以外に何も無いん  
だということに気が付き愕然とした。

驚く程に、何も無い。

こんな自分に価値などあるのだろうか。

その思い付きのあまりの空虚さに底冷えのする恐怖を感じ、身震い  
した。

居ても立ってもいられなくなった私は、スケートの練習場に出向い

た。

少し滑るだけでもしなければ、正気を保てない気がした。でもそれは、自分で自分をさらなる絶望に落とす行為でしかなかった。

スケートシューズを履いて、リンクに立つことはできた。

ただ滑るだけなら、普通にできそうだ。

だけど、それ以上のフィギュアの技巧ができる気がしない。どういう訳か片足を床から離すことすらできなかったのだ。

やはり、かつてのバランス感覚がどうやっても思い出せない。

広大なリンクの反対端では、どこかの選手なのだろう、コーチ役に指示を受けながら滑る者がいた。華麗なフォームを決めて優雅に滑走しているのを見ていられなくなった私は、逃げ出すようにリンクから立ち去った。

レンタルシューズを返却してロビーに出たところで、ロビーでおしやべりしている少女たちの脇を通った。

「見た？さっきのジャンプ！」

「相変わらず綺麗だよねえ」

「優勝間違いなしじゃん！」

聞きたくない！

私は足早にそこを歩き抜けた。

でも、おしやべりは容赦なく続けられる。無為の声が耳に流れ込むのを止められない。

「そう言えばさ。どうしたんだろ。隣の区の人。」

「事故ったつきりじゃん」

どきりと胸が痛んだ。

他でもない。その話題が指しているのは、私のことだ。

今の私は目立ちたくないが為に地味に変装を施していた。気付かれたい様子もないし、気付いて言っている訳でもないだろう。だけど、残酷な偶然の仕打ちに心の底が挫けた気がした。

「もうダメなんじゃないかなあ。ものすごい重体だつて聞いたよ？」

最も端に腰掛けていた、長い髪を両脇で括った少女の無邪気な言い種に、たまらず私はそこから駆け出した。

気が付いた時には、私はどこも知れぬ河原で泣き崩れていた。

（もうダメなんじゃないかなあ。）

あの少女の台詞がこだまする。絶望のどん底に叩き落とされた心地だった。

もうなにも考えられなくなった私は、目の前を流れる川にふらふらと近寄っていった。

「まあ、待て。」

そこに突然、笑みを含んだ男の声がかけられた。

その深みのある声に思わず振り返ると、彫りの深い顔に微かな笑みを浮かべた黒いスーツを着た男がすぐそこに立っていた。

老成した中年とも精力に溢れた壮年ともとれる不思議な魅力を放つ男だった。

「それが苦渋の末に選んだ道だと言うのなら、俺も止めはせんのだがな。ふっふ。野暮は言うまい。先へ進むも俺の話聞くも、お前の自由だ。好きな方を選べ。俺はここで勝手にしゃべらせてもらう。」

呼び止めておきながら、自殺を止める気はないと奇妙なことを言う男の話に、つい興味が湧いてしまった。

立ち止まり、首だけ巡らせた私が見ている前で、男は宣言通りこちらの体勢に頓着せず語り出した。

「両足を付け根から失ってもマラソン大会に参加した男がいたそうだな。両手と尻で移動するという方法でな。ふっふ。そんな顔をするな。」

「だからお前も頑張れ」とかいう話をするつもりはない。「表情に露骨に出ているだろう、男は苦笑してそれを否定した。

思えば、その時点で男の話術に引き込まれていたのだ。

「義手、義足を装着して運動競技を楽しむ者もいるな。あれを、生身であることを貫き通すことを諦めたと見るか、義肢に妥協したと

見るかは人それぞれだろう。」

躊躇なく障害者の心のタブーを口にする男に嫌悪感を覚えたが、もしかしたらこれも男の話術の一環だったのかもしれない。

「いずれにせよ、己の魂の望む輝きを放つ方法を得た人間の姿は美しいものよ。自らの在り様を追求し続ける姿勢こそが、な。」

そこで男は、傍らに提げていたスーツケースを持ち上げ、こちらに向けて中身を開いて見せた。

その中身に私は驚いて目を見張った。

「ふっふ。本物を見るのは初めてだろう？ そうだ。これがガイアメモリだ。今のお前にうってつけの、良いメモリがあつてな。」

男は、スーツケースの中の大量に並んだメモリの中から一本を選び出すと、それを前に突き出した。

それに圧されたように、私は僅かに身を引いた。

「ふっふ。そう怖がるな。これは、使いようによつては良い補助器具となる代物だ。自殺を考えるほど心が折れたお前でも、もしここに欠落した機能を完全に補うことができる補助器具があるとしたら、どうだ？ やり直せる手段が手の届く所に現れたなら、お前なら、どうする」

それさえあれば、もう一度、あの時のように華麗に舞うことができるのか。

思わずそう問うた私に、男は「お前次第だ」とのみ答えた。

私は川から離れ、男の手からそのガイアメモリを受け取った。

『あははっ！ いいザマー！』

交差点で片っ端から自動車が激突し積み重なってゆく惨状を屋上から見下ろして、志穂は異形の姿で哄笑を上げていた。

『あーああ。もうこんくらいでいいや』

言って、肘の辺りに手を遣ると、その異形の姿が揺らめいて体軀を縮ませ、肘のコネクタからガイアメモリを排出すると人間の少女の姿へと戻った。

「」

そして鼻歌混じりに屋上入り口に歩き出した志穂の前に、一人の男が立ち塞がった。

「ふっふ。奇妙なところで会ったな。」

「!?!」

その姿を見るなり志穂は身を強ばらせた。

自殺の瀬戸際で志穂にガイアメモリを売り渡した、あの時の黒スーツの男だった。

片手にあの時のスーツケースを、反対の手にはかつては持っていなかったステッキを持って立っていた。

「……あ、あなた!?!」

「おやおや。フィギュアスケートの選手として返り咲く夢はどうしたのかな?」

語彙の割には毒を含まない、むしろ快活な物言だったが、言われた志穂は肺腑を抉られる思いだった。

「……う、うるさい! 私が買ったものを、私がどう使おうと勝手にでしょ!?!」

「ふっふ。勘違いするな。俺もガイアメモリの使用方法については特に制限は設けていない。そんな契約もないしな。」

揚げ足を取られ、志穂の顔が羞恥に染まる。

「ただ、シーズンも真っ盛りだろうに、自殺を考えるほど焦がれていたフィギュアもせぜにいったいどうしたのかと思ってな。なに。アフターサービスというやつだ。」

言ってくつくつと含み笑いをする男の態度に、とうとう志穂の怒りが沸点を越えた。

目つきを鋭くし、先ほど抜き出したガイアメモリを再び構える。

その時一瞬、男が志穂の背後に意外なものでも見たように片眉を上げ。

「お取り込み中、失礼しますね」

唐突に新たな声が割り込み、志穂は慌てて背後を振り向いた。

こちらは、男とは逆に丁寧な言葉遣いの中に多分に毒を含んだ少女の声だった。

果たしてそこに現れたのは、涼やかな声に違わぬ整った面立ちの少女であった。

エプロンドレスにスカーフを纏った、なんの変哲もないロングヘアの少女。

だが、その少女がいる場所が、このビルの屋上を取り囲むフェンスの角だということに気付き、その異常に志穂は混乱した。

（この女は、どうやってそこに現れた！？）

近くに階段もない。この謎の少女がそこに現れるには、ビルの外壁をよじ登ってくるよりほかにないはずだ。

志穂が困惑している間に、謎の少女は志穂と男とを眺め遣ると、その茫洋とした顔がいきなり鋭く表情を変えた。

「あなた。「売人」だね？」

少女は、志穂を無視して黒スーツの男を睨みつけていた。

「ふっふ。セールスマンと言ってもらいたいな」

男も鷹揚に応えた。

「あなたに聞きたいことがあるの。」

言うなり少女が男に向かって歩き出すが、その前に志穂が立ち塞がった。

少女は志穂のことなど眼中にもない様子だったが、冗談ではない。

志穂はこの少女を覚えている。

かつて、スケート場で本人がいるとも知らずに怪我した志穂を下らない噂話でこき下ろしたあの少女たちの一員だ。

（もうダメなんじゃないかなあ。）

あの嘲りとも取れる言葉は脳裏に焼き付いていて離れない。

「その前に、私もあなたに用があるんだけど」

少女に、この怒りを思い知らさねばならない。

そう考えていた志穂は、自分とそんなに体格の違わない少女の片腕の一振りで簡単に振り払われて呆気なく転倒し、目を白黒させた。

「!？」

「ふっふ。おもしろい邂逅だが、これはアフターサービスには余るな。」

だが男も少女が志穂を振り払った一瞬に後ろに跳ねると、いかにも不自然な跳躍軌道でフェンスを軽く飛び越えてしまった。

「ひとつ言っておこう。お前のその現状は、人間として決して珍しいものではないぞ」

男は、謎の少女から距離を取りつつ、けれど志穂に向かって語りかけた。

「俺が言ったことを覚えているか？ 己の魂の望む輝きを放つ方法を得た人間の姿は美しいものだ、と。 自らの在り様を追求し続けた結果がそれだと、お前は胸を張って言えるのだろうか」

はあっはっはっは……と甲高い嘲笑を撒き散らしながら、黒スーツの男はビルの谷間に消えていった。

「待ちなさい！」

「待つのはあんただよ！」

男が飛び越えたフェンスへ追いつがる少女に向け、立ち上がった志穂が一喝した。

「……。」

その少女は立ち止まると、年頃の女の子にあるまじき冷酷な瞳で志穂を振り返ってきた。

「……じゃあいいわ。あなたに詳しく聞かせてもらおうかな。」

剣呑な様子で完全に身体ごと志穂の方へと振り向いた少女の腹部に蒼い光が閃くと、なにやら青い機械をバツクルに据えたベルトが出現した。

「驚生の怪我のお礼もしたいし。」

そして目の高さに上げた手に、志穂のものとはデザインの異なる蜂蜜色のガイアメモリを掲げると、それをベルトバックルの機械のスロットに挿し込んだ。

「が、ガイアメモリ!？」

志穂が謎の少女の持ち物に驚愕しているうちに、少女の姿が揺らめき、ベルトを残して見知らぬ長身の男の姿に変移したことで、志穂はさらに困惑した。

その男はなぜか病人着を着ており、右足をギプスで固めていながら、なんの痛痒もなく両足で立っている。

そしてその男も左手に純白のガイアメモリを取り出してベルトのスロットに挿し込んだところで志穂は我に返り、自分のガイアメモリを肘に突き刺した。

「な、なんだか知らないけど、あんたなんかあああああ!」

ガイアメモリを飲み込んだ志穂の身体は輝くノイズに包まれてガイアメモリに封入された記憶の影響を受けて変容してゆく。

やがて現れたのは、まるでデッキブラシかタワシのように固そうな獣毛に包まれた、細身の熊のようなドーパントだった。手足や肘など、所々につやつやした表皮を覗かせている。

「あんたの声が脳にこびりついて、イライラするんだよつ!」

「……知らない」

《フォービドゥン!》

《イレギュラー!》

見知らぬ男が昏い眼差しで志穂の絶叫を一蹴し、ガイアメモリを二本挿した機械を左右に展開させると、その男に身体に白と黄色の欠片が殺到し包み込むとたちまち左右で色の異なる怪人の姿となった。

「俺たちはXX<sup>セキス</sup>。」

男の声が名乗ると、右半身がプリマドンナのように優雅に片手を差し伸べた。

「さあ。」

続いて現れたその声で、志穂はこの二色怪人の中にあの少女が間違

いなく存在すると悟った。

『無様な悲鳴を上げる。』

翻った左半身が左手の親指を鋭く横一文字に一閃し。

『それはこっちの台詞だよ！』

親指を真下に捻ったのと同時に両者が互いに向け駆け出した。

## File・02 銀盤を舞うF/オーバーローテーション（後書き）

仮面ライダー XXまとめ@Wiki

メモリガジェット

・オウルムーバー

オウルメモリを挿入するとフクロウ型のライブモードとなる紅茶色のデジタルビデオカメラ型ガジェット。左右に展開するディスプレイパネルを持ち、変形時はそれらを翼として飛翔する。通常のデジタルビデオカメラの機能に加え、パピリオフォンとのデータリンク機能を持ち、互いに画像・音声を送受信できる。

《ヒート!》

《メタル!》

メモリを二本差し替えたバツクルのスロットを振り払って展開し、左右の体色を変更したダブルは背中に出現したメタルシャツフトに手を遣りながらクロコダイル・ドーパントに蹴りを放った。

『ーーーーッ!』

当然それを噛み砕こうとクロコダイル・ドーパントは自身の身体よりも巨大な顎を全開にして待ち構えた。

ずらりと弧を描いて並んだ無数の牙は最早、身体の前面全てが攻撃範囲と言っても過言ではない脅威。

だがダブルは即座に蹴り足を引くと、代わりに収納状態のままのメタルシャツフトをその口の中に縦に突っ込んだ。

『ーーーーッ!?』

閉じ合わせようとした上下の顎がつかえ棒にしたメタルシャツフトのおかげで閉じきらず、間抜けな角度で口を開けたままクロコダイルドーパントはおろおろと狼狽える。

『あああなんか美しくねえなあ!』

『古典的な手段だが、最も簡易で手堅い対処法だよ。翔太郎。』

美学にそぐわない作戦に翔太郎はイヤそうに身悶えするが、フィリッブは一切意に介さずに右目を明滅させて注釈した。

『そんなことよりも翔太郎。こいつを早く安全圏へ追い出すんだ』

『ああああ分かってるぜ相棒!』

半ば自棄で叫んだダブルが狼狽えるクロコダイル・ドーパントに飛びかかり、殴り、蹴りつけて押し遣ってゆく。

『おらあああああ!』

闘志の高ぶりに応じて噴出した炎を纏った右の拳を叩きつけ、叩きつけ、さらに飛び上がって殴りつけてドーパントを吹き飛ばした。

やがて、警察が封鎖したのか無人の林道にクロコダイル・ドーパン  
トが転び出て、それを追ってダブルが飛び出してきた。

『さあーて。熱うーいお仕置き、行ってみつかあ！ フィリップ、  
メモリブレイクだ！』

スナツプをかけて一振りした左手の指先を突きつけるが、フィリッ  
プは応えず、右半身が しれっといった調子で右手の人差し指を突  
き出した。

『……………あ？なんだよ』

『翔太郎。肝心のメタルシャフトがあそこだよ』

もたもたと地面を転がっているクロコダイル・ドーパンの顎に挟  
まっているメタルシャフトを指してフィリップが呟いた。

『……………あ。』

『まいったね。クロコダイルドーパンの最大の攻撃力を封じたま  
では良かったけど、これでは僕たちもメモリブレイクできない。』

『おおおいッ！？ どーすんだこれよおッ！？』

肩を疎める右半身に、左半身が激昂して器用にツッコんだ。

仮にメタルのメモリをチェンジしたなら、クロコダイル・ドーパ  
ンの顎を封じているメタルシャフトも消滅してしまうだろう。

『ちっ、こうなったらベルトのスロットで……………』

舌打ちしてダブルの左手がバツクルのスロットから金属色のメタル  
メモリを引き抜くが、それを挿し込もうとした右腰のマキシマムス  
ロットには既に真紅色の右手の二本指が突っ込まれ塞がれていた。

『……………。おいフィリップ。その指どけるよ。マキシマムドライブで  
きかないだろ』

『断る。専用デバイス以外でのマキシマムは危険だと前にも説明し  
ただろう？』

左手が摘むメタルメモリで右手を突つつくが、フィリップは右目を  
明滅させながら頑として翔太郎の操作を拒否していた。

『言ってる場合かよ！？ 絶好のチャンスだぜ！？』

『短絡的に功を焦るのは君の悪い癖だよ、翔太郎。まずはリボルギヤリーを召還するんだ。』

『おめえは回りくど過ぎるんだよ!』

《痴話喧嘩は犬も食わんわ!》

そんな格言が黄金色に刻まれたスリッパのフルスイングがダブルの後頭部に炸裂した。

「なあにやってんの! あれ!」

つんのめったダブルの背後に現れた亜樹子が、いま打ち下ろしたスリッパをびしりと前方に突き出した。

見れば、先ほど地面でもがいていたクロコダイル・ドーパントが体勢を立て直し、口にメタルシャフトをくわえたままこちらに背を向け両手足を地面に突いていた。

そして身体から揺らめく大気のような不可視の力場を発生させるとそれは地面のアスファルトに、コンクリートに広がり、突如路面が粉々にめくれ上がるとクロコダイルドーパントの身体に密集し始めた。

『なあつ!? ありや、まさか!?』

驚愕する翔太郎の脳裏に、かつての幼馴染みが起こした事件での戦いの記憶が蘇る。

ティールックス・ドーパントとは構成物質が異なるが、どうやら周囲の物質を利用して己の肉体を拡張させる機能をクロコダイル・ドーパントも持っていたらしい。

やがてそこには、クロコダイル・ドーパント自身を頭部とした全長二十メートルにも及ぼうかという岩塊で構成された巨大なクロコダイルが出現していた。

『ooooooooo!』

一声吼えたクロコダイル・ドーパントは岩の首を振るって近くの電柱を薙ぎ倒し、その衝撃で口の中のメタルシャフトを弾き出した。

そしてそのままのしのと意外に俊敏な動きで走り去ってゆく。

『翔太郎！早くリボルギャリーを呼ぶんだ！』

『ええい！イヤなドーパントだぜ！』

叫びつつ、ダブルは取り出したスタッグフォンを展開して操作した。

志穂が変異した剛毛に包まれたドーパントに、巧妙に間合いを狂わせる歩法で迫ったゼキスが流れる動作でパンチを放った。

『！？』

だが怪訝に首を傾げたのは、突如突き出した腕が火だるまになった当のゼキスのほうだった。

慌てて拳を引いて点いた炎を振り払う。

『あははっ！どうしたの？ほら、殴ってごらんよ！』

『こいつ……』

ドーパントの嘲笑に真理亜の意識が加熱するが、驚生は冷静に今の怪現象を分析していた。

『……パンチが急に重くなった。強力な反発を感じた。これは……』  
余裕の態度で挑発するドーパントに向かって構え直したゼキスは、  
今度はフェイントを織り交ぜてあっさりドーパントの死角に回り込むと後頭部めがけて回し蹴りを放った。

『！？』

ところが、その蹴り足までもが燃え上がって失速し、ゼキスはたたらを踏んで後退した。

『どうしたの？止まってる相手に当てることもできないの？』

『こいつ……！？なんなのこれ！？』

『ふん。推測ではあるが……』

一回転して起き上がったゼキスはベルトバックルをたたみ、左側のスロットからイレギュラーメモリを引き抜くと、代わって取り出し

たスファイアメモリを差し込みスロットを振り払ってバツクルを展開した。

《フォービドウン！》

《スファイア！》

純白の左半身をパーティングラインから滲むようにアイスグリーンに変色させ、「フォービドウンスファイア」にフォームチェンジしたゼキスは背中に形成された槍「スファイアステイカー」を肩越しに引き抜き伸長展開させて一振りした。

『これならどうだ』

小細工なしの正面からの鋭い刺突。

拳や蹴りよりはドーパントの身体に迫ったが、やはり槍は目に見えない抵抗を受けて失速しスファイアステイカー表面がたちまち赤熱化した。

さすがに鋭利な先端が迫るのを見てドーパントは慌てて身を翻し、ゼキスも槍を引き戻した。

『……ふん。なるほどな』

槍を一振りすると、ゼキスは掴む手をより槍の柄尻の方に寄せて長く持ち変えた。

武器のリーチを最大限に活かし、謎の力場の強行突破を狙う構えだ。驚生の意図を瞬時に理解した真理亜も同意し再びゼキスに一心同体の力がこもる。

『今度こそ、喰らえ』

仄暗い声音で宣告し、突貫の勢いでスファイアステイカーを腰溜めに構えたゼキスが一直線に突撃してゆく。

『お断りよ』

ところが、これまで余裕の態度で待ち受けていたドーパントが今度は両手を前に突き出した。

すると、ドーパントの掌からなにやら毒々しいサイケデリックなカラーのフィールドが粘液のように溢れ出し、ドーパントの手前に流れ落ちてコンクリートの床に広がると、謎のフィールドは滲むよう

にして消えてしまった。

『今さらそんなことでこの突撃は止まらんぞ』

今の怪現象が反発の力場を生むドーパントの能力発現の予備動作なのだろうが、それを突破する為にゼキスは助走を加えているのだ。充分な突進力を得た今の槍なら、あの謎の抵抗感をも貫いてドーパントに攻撃を届かせることができる。

『そりゃ止まらないでしょうよ』

『!?!?』

こちらを肯定するドーパントの呟きを訝しむと同時、駆けるゼキスの踏み下ろした前の足がいきなり横滑りして転倒してしまった。

『なに!?!?』

見るからにざらざらな加工を施されていてどうしようと滑りようのないコンクリートの上を、槍を抱えて横倒しになったゼキスの身体がまるでそこが氷の上かのように滑ってゆく。

『まさか!?!? さっきの力場は!?!?』

『あはっ!?!さっきの威勢がまるでバカみたいじゃない!?!』

屋上の床を滑るゼキスのベクトルの先にいたドーパントが嘲笑を上げ、滑りの良い床の状態を物ともせず踏み込むと、体勢を立て直しもままならずにもがき続けるゼキスの脇腹を力一杯蹴り飛ばした。

『ぐっ!?!?』

まともな防御態勢も取れない状態で喰らった痛撃に悶絶するゼキスの身体は、ドーパントのパワーで蹴られたにしても有り得ないほど冗談のような勢いで逆戻りに滑ってゆき、屋上を囲むフェンスを突き破って空中に飛び出すとそのまま落下していった。

今この風都を横断する国道は、道を走る有り得ない物体に大騒ぎとなっていた。

四車線の道路の一方を自動車の流れに逆らって走っているのは、巨大なワニ。

大型トレーラートラックほどもある巨大なワニがその巨体からは思いも寄らない速度で爆走しているのだった。

迫る巨体に泡を喰った自動車は右に左にと避けようとするが、太い胴体から左右に突き出す形で生えた手足が端に寄った車までもを跳ね飛ばしてしまう。

『くそつたれ！ おい！止まれ！せめて人のいない方に行け！』  
マシンハードボイルダーに跨り、国道の順路車線を車を次々と追い越して走りながらダブルはクロコダイル・ドーパントに怒鳴りつけた。

タービュラーユニットがあれば簡単に先回りして誘導なり阻害なりができたのだが、事務所から発進したりボルギャリーを待つ暇を惜しんで追跡を優先させた為、ダブルはいま地道に併走して罵声を浴びせることを繰り返していた。

『くっそ！もどかしいぜ！』

反対車線で起きる惨状に、この車線の車も何台かが泡を喰って停まるものもいる。

その車の隙間を縫って走り抜けるが、クロコダイルドーパントとの差は縮まらない。

『翔太郎。この先には県道との大きな交差点がある。リボルギャリーを先回りさせよう。』

『ああ！』

フィリップの指示に、ハンドルから手を離す訳にはいかない右手に代わって左手がスタックフォンを取り出してリボルギャリーの遠隔操作をする。

その間にもクロコダイルドーパントは自動車を蹴散らして爆走を続け、ハードボイルダーは車の間をすいすいと駆け抜けてゆく。

やがて、目的とする県道との交差点を示すブルーの看板と信号機が見えてきた。

その交差点に横滑りで現れたりボルギャリーの姿は、無人機にも関わらず翔太郎の目には非常に頼もしく見えた。

「よっしゃ！そこで道塞いでくれよお！」

ところがリボルギャリーは進入してきた勢いそのまま横滑りを続けて交差点を通過してゆき、反対側の巨大看板に激突して停止してしまつた。

「は！？」

そして爆走を続けるクロコダイルドーパントも交差点に進入するなり体勢を崩して大きな体をスピンさせ、反対側の商店の並びに飛び込み何軒かを叩き潰して半身を埋めてしまった。

「な、なんだありや！？」

「翔太郎！止まるんだ！この現象は、例の謎の交通事故そのも」  
フィリップの警告も虚しく、ダブルの跨るハードボイルダーも呆気なく転倒し広大なアスファルトの上を実に勢い良く滑っていった。

「くっ！？」

重力に引かれるまま落下を続けるゼキスの身体。

それでもなんとか受け身か着地体勢を取ろうと宙でもがくゼキスの視界に、交差点で起きた巨大な物体の激突事故と、それに続いて路面を横滑りで飛び込んできたダブルの姿が入ってきた。

「なに！？」

不意の邂逅にわずかに狼狽える鷲生。

だが空中にあつては落下軌道を変えることなどできない。

やがてアスファルトとの激突の瞬間、ゼキスの身体は路面を滑ってきたダブルの身体に撥ねられる形で真横に弾き飛ばされた。

強靭かつ柔軟な強化外骨格同士の激突は、アスファルトの直撃よりは衝撃を吸収してくれたのか、落下のダメージはそれほど深刻なも

のではない。

驚生は起き上がるうと地面に手をついたが、左手が抵抗もなく滑り再び地面に突っ伏してしまった。

『くっ!? ここもか!?』

『おい! 白衣!』

そこに、脇腹で道路標識をへし折って停止したダブルが仰向けのまま呼びかけてきた。

『お前! こんなところで変身してナニしてんだ!』

地面に転がったまま喚くダブルを無視し、ゼキスはスフィアステイカーを地面に突き立てると、それを支えにしてようやく立ち上がった。

『翔太郎。構っている場合ではない。今のうちにメモリを変えるんだ』

『お、おお』

言われたダブルは転がった姿勢のままたたんだバックルからメモリを引き抜き、持ち替えた別のメモリをスロットに装填してバックルを展開させた。

《ルナ!》

《ジョーカー!》

セントラルパーテーションから外側へ滲むように体色を右をイエロ―に、左を黒に変化させたダブルは、右腕をゴムのように長く伸ばすと信号機の柱の突起を掴んで身体を持ち上げようやく立ち上がった。

そこに、ゼキスとダブルの前方に、真上から落下してきた人影がなんの痛痒もなく着地してみせた。

たわしのような剛毛を生やした細身の熊のような異形。志穂が変貌したドーパントだ。

『……? なに? 仲間?』

『違う』

志穂がダブルとゼキスを指さして怪訝に呻くが、驚生は即座に否定

した。

『ドーパント!? おい白衣!お前、またこんなことやってんのか!』

翔太郎が怒鳴りつけるが、ゼキスは無視してドーパントを睨み付けている。

『くそつたれ!数えきれなくなる前に、こんなこと繰り返すのはもうやめろ!』

ダブルは伸ばした片腕でぶら下がる身体を大きく揺らし出した。

『あんたもだ!』

言いながら、ダブルは右足をも長く伸ばすとドーパントの手前の地面に足を付けた。どうやらそこは、この滑る力場の範囲外のようなのだ。そしてダブルは己の足を縮めながらドーパントに迫る。

『うおおおおお!』

『なにこいつ!? 気持ち悪い身体ね!』

志穂は伸び縮みする黄色い手足に軽くヒキながらも、迫るダブル目掛けて片手を突き出した。

その掌からサイケデリックなカラーのフィールドが泡のように滲み出すと、目の前に着地したダブルに発射された。

『うわっ!?!』

ぶつかったフィールドは液体のように広がって飛び散り、ダブルの身体の表面に滲むように消えてしまった。

『おい!? なにすんっ!?!』

そしてそのままダブルは両足を天に突き上げて真っ逆様に転倒してしまった。

反射的に身体を支えようと突き出した両手も呆気なく滑り背中から地面に激突してしまう。

『……あれ、なんだか知らないけど使えそうね』

足下で七転八倒しているダブルを無視して、志穂は交差点の向こうでもがいている巨大ワニを見遣ると片手を振る動作をした。

すると滑る地面のせいで身動きが取れなかったはずのクロコダイル・ドーパントが体勢を取り戻し、アスファルトの上を普通の調子で歩き出した。

こちらを振り向き巨大な顎を全開にして咆哮する。

『ーーーーーッ!』

そして地面でもがくダブル目掛けて駆け出してきた。

『うわーーーー!? ど、どーなってるんだこれ!? めも、メモリチエンジを!』

慌ててバツクルをたたむが、メモリを摘んだ左手の指がするりと滑って弾かれてしまった。

『あ!?』

何度やっても滑る指先はガイアメモリを摘むことができず、ダブルの指圧力を以てしてもスロットからメモリを引き抜くことができなくなっていた。

メモリチエンジが、できない。

『ど、どーなってるんだ!?』

『そうか!分かったぞ!』

この窮地にあつて、フィリップは空気を完全に無視して歓声を上げた。

『おい!? フィリップ!言ってる場合か!?』

『この現象さ、翔太郎!』

だがフィリップは構わず右目を明滅させてしゃべり始める。

『アキちゃんに調べてもらった情報と過去の交通事故の入院患者を、さつき照合してたのさ!その中に、偶然「空白の関係者」に関わりのある交通事故被害者がいてね』

『だからなんだよ!?!』

迫り来るクロコダイルに気が気でない翔太郎だが、絶好調に弁舌を振るうフィリップには気にした様子がない。

『このドーパントは女性の声。今の条件で浮上した人物も女性。

あなた、柏木 志穂さんだね?ファイギュアスケーターの。』

『!?!?』

目の前に立つ、細身の熊のようなドーパントが狼狽えたように身を震わせた。

『そして受け取ったガイアメモリの正体も判明した。これは摩擦係数を自在に操る「フリクション FRICTION」。「摩擦の記憶」だ!』  
フィリップの鮮やかな推理は、すくい上げるように噛みついたワニの巨大な顎に振り上げられ尾を引いて消えていった。

『うわー!?!? 噛まれたー!?!? 死ぬー!?!?』  
慌てふためくダブルをくわえたままクロコダイル・ドーパントが道路を爆走してゆく。

あまりの滑りの良さに牙も立たないのが幸いしてダメージはないが、凶悪な牙の列に挟まれたままあちこちに振り回され、脱出しようにも手が滑ってままならない。

『なるほどな。「摩擦の記憶」。それがこの交通事故の正体か。』  
『種が知れたからって、なんだって言うの?』

この交差点の摩擦係数をゼロにしていたフィールドが解除されたので、ゼキスも普通に立つことができるようになっていた。

『お前には、売人のことについてしゃべってもらわねばならない。まずはお前を無力化する』

『ふざけないで!そこにいる女に、私と同じ苦しみを味わわせてやるんだから!』

『死ぬことよりも苦しいことなどない!』  
『!?!?』

突然のゼキスの叫びに驚愕する志穂の隙を付いてゼキスが駆け出すが、志穂もそう長くは狼狽えなかった。

『くっ!?!?』

志穂は、フリクシヨン・ドーパントは右手から例の摩擦係数を操るフィールドを生み出して発射するが、ゼキスはそれを簡単に横にかわした。

『!?!?』

ところが、フリクシヨン・ドーパントの左手が同時に地面にフィールドを放っており、それに足を取られたゼキスは体勢を崩して結局放たれたフィールドに右半身を触れてしまう。

転倒したゼキスは、地面と、右半身の二重の滑性によってまともに立つこともできなくなった。

なんとか力場の浸食を受けていない左半身でスフィアステイカーをアスファルトに突き刺しその場に留まっているが、このままでは攻撃も防御もできない。

『ふん！ 全身の摩擦をゼロにされたら武器も持てなくなる！ 避けることはおろか立つこともできなくなったあんたに何ができるかしら?』

そして今、フリクシヨン・ドーパントが改めてゼキスの全身をフィールドで塗り潰すべく、外しようのない至近距離でかざした掌からサイケデリックなカラーのフィールドを泡のように生み出し始めた。

『……!』

『くのつ!? ののつ!? 止まれ! おい!』

白昼の街を駆ける巨大ワニにくわえられたまま、ダブルは己を挟む顎から逃れようと必死に殴ってもがいていたが、拳がごとごとく滑る為にたいした打撃にならずクロコダイル・ドーパントの動きを妨げるには至らない。

やがて次の交差点に差し掛かったところで、ようやく復帰したのか別方面から回り込んできたリボルギャリーが交差する道路からクロ

コダイル・ドーパントの岩塊のボディに横から体当たりした。

『oooooooooo!!?』

絶叫と共に無数の大小の石があちこちに飛散する。

アスファルトを寄せ集めて作ったボディが真つ二つに砕け、吹き飛ばされたクロコダイル・ドーパントが驚愕に吼えたことでようやく顎が開放しダブルの身体が放り出された。

『よっしゃあ! ……ってわあっ!?!』

宙で身を捻って着地するが、今はダブルの体表面をフリクション・ドーパントの滑性フィールドが覆っている。着地するなりダブルは転倒してしまった。

『ああもっ!?! どうやって戦えばいいんだよこれ!?!』

『今なら、どうにかしてジョーカーメモリをマキシマムスロットに挿せば、クロコダイルドーパントはブレイクできる。』

岩塊のボディを真つ二つにされたクロコダイル・ドーパントは、吹き飛ばされた道路の先でまた力場を展開して辺りのアスファルトを掻き集めていた。失った下半身が見るみる再構築されてゆく。

『どうやってだよ!?! メモリも滑って引き抜けねえんだぞ!?!』

『スタッグフォンを使おう。』

言って右手がスタッグフォンを取り出すが、呆気なく滑り落としてしまう。

『ダメじゃねえか!?!』

『そんなことはないさ』

翔太郎の諦観の叫びも聞き流してダブルはひざまずくと、地面と挟み込むように両手でスタッグフォンを押さえ込み、左右から指先を捻じ込んでディスプレイを展開させた。

そして滑らないよう細心の注意を払って真つ直ぐに指先を落とし込みキーを打ち込んでゆく。

この操作は、普段からメモリガジェットの制作やメンテナンスを行っているフィリップの器用さがあればこそ、だ。

突然現れた怪獣にざわめく白昼の交差点の真ん中で、シールドにう

ずくまるダブルの作業は黙々と進められる。

そして再び両手で包み込むようにしてディスプレイを閉じられたスタックフォンのサイドボタンを押し込むと、ディスプレイの左右のフレームのみが立ち上がり展開した。

このスタックフォンのライブモード時の角にあたる部分は、工作用のパワーアームとしてペンチのように使用できる。

『これで。』

『さすがだぜフィリップ！』

さっそくパワーアームにジョーカーメモリを噛ませて引っ張るが、掴んでいる手が滑りスタックフォンが落ちてしまった。

『ダメか！？』

翔太郎の声が悲嘆に呻く横でその時、停車していたリボルギヤリーのハッチが左右に割れ広がり展開していった。

やがて全開したりボルギヤリーの中から現れたのは、颯爽と青いマチャリに跨り腕組みして不敵な笑みを浮かべる亜樹子の姿だった。「ふっふっふ。どうやら私の出番のようね！　とう！」

掛け声と共にフロントスロープを駆け降りてきた亜樹子が乗る自転車は、なんのことはなく呆然と見つめるダブルの横までからからと慣性でやってきて停止した。

そしてキメ顔で親指を立てて見せる。

『……いや、もうどっからツッコんでいいんだか分かんねえよ』

「任せて！」

言うなり亜樹子はスタックフォンをひったくるとパワーホーンをジョーカーメモリに押し当てた。

『おお。さすがアキちゃん！　第三者の手を借りることまでは思いつかなかったよ。』

『ってかお前、この自転車ダレんだよ』

「警察署の駐輪場に停めてあったのを借りてきたの！」

フィリップの賞賛を遮った翔太郎の問いに、亜樹子はうつつむいたままあっけらかんと答えた。

「借りたつて、おまえ…… それ、「シルフィード」のチャリじゃねえか!? 自転車便の! 配達のひとつ困ってんじゃねえか!?」  
「ん〜。だからあ、借りたんだから、あとできちんと返すよお〜」  
コンテナを積んだ青い自転車を指してダブルがわたたと亜樹子を交互に見返すが、亜樹子は構わずに作業を続けている。

「……………ッ!」

聞こえてきたうなり声にそちらを見遣れば、クロコダイル・ドーパントは巨獣形態の下半身の再構成をほとんど終えており、尻尾がまだ半ばながら今にも動きだそうとしていた。

「おい! 亜樹子! もういい! 下がれ!」

「んん〜!? もーちよい……取れた!」

弾かれたようにバンザイする亜樹子の目の前を、すぽーんといった調子でジョーカーメモリが跳ね上がった。

「良くやった亜樹子お!」

メモリを宙でひったくるように掴み取り……した瞬間、ジョーカーメモリがさながらウナギのようにダブルの手からすっぽ抜けていった。

「ああ!?」

「……………翔太郎。自分の手が滑るのを忘れたのかい?」  
フィリップの呆れた声が翔太郎の脳裏で溜め息を吐いた。

そこでとうとうクロコダイル・ドーパントが移動を開始した。ダブル目掛けて駆け出してきている。

「くっそ!」

「なんの! きゃーっち!」

毒吐くダブルの横を亜樹子が華麗な跳躍でかすめ飛び、宙を舞うジョーカーメモリをすぼめた両手で包み込むようにキヤッチした。

「あーんど、りりーす。」

と、言いながら呆然とするダブルの右腰のマキシマムスロットに両手で注ぎ込むようにメモリを差し入れると、そそくさと安全圏へ走り去ってゆく。

「しょーたるーくーん！がんばってー！」

『よっしゃあ！つくづく良くやった亜樹子！』

喝采を上げ、ダブルはマキシマムスロットに収まったジョーカーメモリを一段押し込み、サイドのマキシマムスイッチを叩いた。

《ジョーカー！ マキシマムドライブ！》

その瞬間に駆け込んできたクロコダイル・ドーパントの突進を横に転がって避けたダブルの身体がセントラルパーテーションを境に左右に分離した。

そして地面にひざまずくジョーカーボディを基点に飛び上がったルナボディが次々と分身して四体が増えると、爆発的な勢いで伸長した手足がクロコダイル・ドーパントに殺到し、岩塊でできた身体のうちこちを粉碎した。

『oooooooooo!?!?』

アスファルトの拡張体を砕かれ悲鳴を上げるクロコダイル・ドーパントの本体が落下してくる。

飛翔していたルナボディも分身を集結させながらジョーカーボディの元へ戻り、今度はルナボディを基点にしてジョーカーボディが飛び出した。

『ジョーカーストレージ！』

翔太郎とフィリップの声が唱和し、ジョーカーボディの正拳突きが空中のクロコダイル・ドーパントを貫いていった。

至近距離で滑性フィールドを放たれようとしている絶体絶命の状況で。

ゼキスは左手にアクアブルーのメモリを取り出した。

『驚生！？ それは！？』

ゼキスの脳裏で、真理亜が悲鳴を上げた。

「だめだよ!?」「チャペル」と「デイセプト」は危険だから、あんまり使っちゃダメって言ったじゃない!?」

「だけど、唯一の打開策だ。……いいいよね?」

驚生の、いつになく強い調子の問いに、真理亜は思わず息を呑み、口を嚙んでしまう。

「……うん、いいよ」

結局うめくように応えた真理亜の声を聞くなりゼキスはチャペルメモリをスロットに差し込みバツクルを振り払った。

「今さら遅いよ!」

それと同時にフリクシオン・ドーパントが発射した虹色の泡のような滑性フィールドがゼキスの体表で弾け飛び、セントラルパーテーションから左半身をアクアブルーに変色させたゼキスをフィールドで包み込んだ。

「さあここからはいたぶっていたぶっていたぶってあげるから!」  
相手を反撃不能に陥れたことに狂喜したフリクシオン・ドーパントが絶叫と共にゼキスに踊りかかった。

ところが、全身の摩擦係数をゼロにされたはずのゼキスが難なく立ち上がると、左腕の一振りと共にフィールドを打ち破ってサイケデリックな飛沫を弾き飛ばしてしまったのを見てフリクシオン・ドーパントは混乱した。

「ええ!?!」

蹴りかかる姿勢で跳躍していたフリクシオン・ドーパントの身体は、迎え討つアクアブルーの拳で激しく殴り飛ばされた。

「あああああっ!?!」

アスファルトを砕きながら転がっていったフリクシオン・ドーパントの身体はそのままの勢いで向かいのビルの壁に激突し大きな穴を穿った。

「……無様な悲鳴には、程遠いな。」

正拳突き姿勢を引き戻したゼキスは、変移したアクアブルーの左肩に細長い紡錘型の肩当てを二重に重ねて装着していた。

「いたぶるだと？ それはこちらの台詞だ。」

仄暗い眩きと共に右手に紫色のディセプトメモリを取り出すと、ただんだバツクルから右スロットのメモリを入れ替えて装填しバツクルを展開した。

「ちよつと！？ 驚生！？」

《ディセプト！》

《チャペル！》

戸惑う真理亜の抗議を無視してゼキスは右半身のカラーも変え、「欺瞞の記憶」と「礼拝堂の記憶」を宿したディセプトチャペルへとフォームチェンジしてしまった。

「うあああああああ！」

ビルの壁に埋まっていたフリクシオン・ドーパントが怨嗟の絶叫と共に飛び出してきた。

「殺してやる！ お前のせいだ！ 殺してやる！」

フリクシオン・ドーパントはそこに停めてあった乗用車に飛びつくと、接触した掌から発するフィールドで瞬時に車体の摩擦係数をゼロにしてゼキス目掛けて蹴り飛ばした。

ドーパントの力で蹴り出された乗用車は、アスファルトの上にあるながら氷の上であるかのように滑らかに滑走してきた。

ゼキスは滑ってきた車を呆気なく跳躍してかわしてしまうが、フリクシオン・ドーパントは次々と別の駐車中の車に取り付いては摩擦を操作して弾き飛ばしてくる。

「あああああああ！」

そして振り上げた両腕を振り下ろすと、サイケデリックな滑性フィールドが濁流のように広がりこの道路の見渡す限りを覆い尽くしてしまった。

「！？」

次々と襲いかかる自動車の群を飛び越えていたゼキスだったが、着地点が滑性フィールドに侵されたのを見て着地するはずの足を右足

に変えた。

『……滑ることなどない。』

ぽつりと呟いたゼキスの右足が接地すると同時、右足は滑ることなく普通に身体の重心を支えて着地した。

ディセプトメモリの「欺瞞の記憶」が、鷲生の「嘘」で力場を欺いたのだ。

続いてゼキスが左足で地面をかするように蹴りつけると、足下の滑性フィールドが微細な光の欠片となって碎け散った。

ディセプトチャペルの前では、いかなる超常現象も意味を成さない。

『そ、そんな！？』

依存していた能力を蹴散らされ、フリクシオン・ドーパントは一瞬動揺するが、すぐに腕を一振りすると三度広範囲に滑性フィールドをばら撒いた。

フィールドは蹴り砕かれた範囲を上塗りしまうが、ゼキスはとうに跳躍している。

フリクシオン・ドーパントも改めて車を蹴り飛ばし始めた。

『もはや一つ覚えだな。』

『うるさいっ！うるさいっ！』

巨大なRV車が、トラックがfrisビーのように回転しながら滑ってくるのを次々と飛び越えて躲す。

迂回して移動するドーパントに対して真っ直ぐに後を追うゼキスだったが、投げ飛ばされる自動車の妨害でなかなか近付けない。

ゼキスの左肩に装着されている、上腕を肘まで覆う紡錘型の長大な二枚重ねの肩当ての、上の一枚が浮き上がり、下端を軸に回転して下腕を覆い拳に被さった。

これによって、左腕を肩から拳先まで覆い尽くすガントレットとなったこれが、チャペルメモリの特殊装備「チャペルクローク」。

『……！』

着地点に凄まじい速度で横滑りしてきたワゴン車に対し、ゼキスは

即座に半身を向け身体に沿わせるようにして構えたチャペルクロークでその突撃を受け止めた。

受け止めた瞬間、滑ってきたワゴン車は一切の反動も音もなくゼキスとの接触の瞬間に「停止」し、同時に車体表面を浸食していた滑性フィールドが微細に砕けて吹き飛んだ。

「ええっ!？」

事の異常に驚愕するフリクシオン・ドーパントが目を剥く先で、ゼキスがなんの痛痒もなく立ち上がった。

停止させられたワゴン車の、チャペルクロークが激突したはずの部分には僅かのへこみもかすり傷も付いてはいない。

チャペルメモリに封入されているのは「礼拝堂の記憶」。

神聖なる堂において清浄を願うこの記憶は、世界のあらゆる現象を「中和」する。

ドーパントがもたらした超常能力も、運動エネルギーでさえも。

立ち上がったゼキスは、停止したワゴン車を歩いて迂回してきた。

右足は、地面の滑性を欺きながら、左足は地面を浸食している滑性フィールドを踏み砕きながら。

「……………く!？」

淡々と迫るゼキスの只ならぬ気配に圧されたフリクシオン・ドーパントは、慌てて傍らに駐車してある自動車に取り付きゼキス目掛けて突き飛ばした。

まるでfrisbeeのようにくるくると回転してアスファルトを滑る自動車。

だが、再び腰を落としてチャペルクロークを前にかざしたゼキスの前で、自動車は音もなく停止し滑性フィールドが吹き飛んだ。

「無駄だ。」

停止した自動車の陰から立ち上がったゼキスがぼつりと呟いた。

「もう、こうなっては如何なる攻撃も俺には無意味。」

「ひ!？」

そしてなお淡々と歩み来るゼキスに底知れぬ恐怖を感じたフリクシ

ヨン・ドーパントは悲鳴をあげると、とうとう後ろを振り向いて逃げ出した。

それもただの駆け足による逃走ではない。自身の体表の摩擦をゼロにしたのか、フリクシヨン・ドーパントはアスファルトの上をまるでアイススケートのように滑走してゆくのだ。

『……そう言えば、フィギュアスケートの選手だったな。』

ドーパントの素体の女の履歴を思い出して驚生はぼつりと呟いた。辺りを見回したゼキスは、交差点の角の瓦礫に埋まっている一台の奇妙なバイクを見つけた。

近寄り引きずり出して起こしてみると、やはり奇妙である。

まず市販品では見たことのない形状をしており、何より前半分が黒、後ろ半分がグリーンという前後で異なる奇抜なカラーリング。改造車だろうか。

『……まあ、いい』

呟くと、ゼキスは回転する車輪を模した「D」を描いたガイアメモリを取り出した。

《ダッシュユ！》

スタータースイッチの入力により封じられた己の記憶を発声したダッシュメモリを、ゼキスはそのバイクのタンク表面に押し当てた。

かちゃ、と軽い音を立てて、破碎された小さな電子部品の成れの果てが地面に散らばった。

『おっしやあ！』

ガッツポーズで腕を振り上げた途端、ダブルは反動で足を滑らせ盛大に転倒した。

『浮かれてる場合ではないようだよ翔太郎。フリクシヨンドーパントの力場はまだ生きている。』

「……そうだ、あと白衣の奴もいるしな」

「ねえねえ!? 翔太郎くん!? これ!？」

地面でひっくり返っているダブルの元に、両手で何かを捧げ持つかのようにした亜樹子が駆け寄り、屈み込んでその掌を差し出してきた。

「あ?」

手も尻も滑って起き上がることもできない為、ダブルは寝転がったまま首をもたげてその掌の中のを覗き込んだ。

そこにあつたのは、亜樹子が拾い集めてきたのだらう粉々に砕けた電子部品、クロコダイルのガイアメモリの成れの果てであつたが。

「……アキちゃん、これだけかい?」

「やっぱり!? 部品少ないよねこれ!？」

右目を明滅させてその異常を問うフィリップの声に、亜樹子は勢い込んでうなずいた。

そこには、どう見積もっても本来のガイアメモリの半分ほどの量の破片しかなかったのだ。

「おい!? なんだこれ!? どういうことだ!？」

「わからない。しかも、従来のガイアメモリにはないパーツも紛れているように見える」

「しよ、翔太郎くん!? あれ!？」

突如亜樹子が突き出した指の先を振り向くと、なんとそこにはメモリブレイクされたはずのガイアメモリを手に立ち上がる男の姿があった。

その男は、翔太郎にも見覚えがある。巨大ワニ捕縛の際に違法飼育の疑いで連行されたはずの男であつた。

「あいつ……!？」

《クロコダイル!》

男は振り上げたガイアメモリを自らの腕に突き立てて揺らめく光に包まれると、再びクロコダイル・ドーパントへと変貌してしまった。

「疾走の記憶」を宿した「ダッシュメモリ」の作用によりパールホワイトとハニーエローに彩られたゼキスの専用バイクに変移したそれに跨ったゼキスが、車道をまるで氷上のように滑走して逃げるフリクション・ドーパントを追走していた。

『あああしつこいつ!?!』

滑走の最中、後ろをついてくるゼキスに業を煮やしたフリクション・ドーパントが前進したまま器用にターンして後方を迫るゼキス目掛けて泡のような滑性フィールドを放つが、今となってはただの飛び道具に過ぎないそれをゼキスは簡単に躲けてしまった。

『きいいいいい!?!』

癪癪に叫んだフリクション・ドーパントは滑走しながらくるくとターンを繰り返しては次々とフィールドを放つが、やはり呆気なく全て躲かされてしまう。

やがてフィールドのうちのひとつがたまたま狙いがそれて地面に命中してしまう。

それは迅速に地面に浸食して滑性フィールドで覆ってしまったが、ゼキスのバイクはそれをあっさり踏み砕いて通過してしまった。最早、ゼキスにはフリクション・ドーパントの能力は効かない。

やがて異形の追走劇は次の交差点へと進入していった。

『ああっ!?!』

そこで、フリクション・ドーパントは路面に散らばっていた無数のアスファルトの欠片につまづいてバランスを崩し転倒してしまった。体表を覆う滑性フィールドのせいで路面を横滑りしてゆく身体に、地面に散らばった大小の欠片がごつごつと振動を与えてくる。

『ああああああああ!?!』

勢いのまま滑るドーパントの身体は、ビルの壁に激突するとまるでビリヤードの球のように均等の角度を描いて跳ね返ってゆく。

目まぐるしく回転する景色と平衡に、混乱した志穂の意識はドーピングを施された超感覚で以てしても現状を把握しきれない。

『あああああああ!?!』

何度ビルに激突しただろう。能力を解除すれば滑走が止まることにも思い至らなくなった志穂の視界に、ガントレットで覆われた左拳を腰溜めに引いて待ち構えるゼキスの姿が入った。

バイクを乗り捨てたゼキスは、地面を転がってゆくフリクション・ドーパントの行方を目で追い、その反射角を冷静に見抜いて進路上に立ち塞がった。計算通りにビルの壁を跳ね返ってくるドーパントに向かって身構える。

チャペルクロークに覆われた左拳を引き絞り、やがて目前に迫ったドーパントの身体めがけアンダースローで殴りつけた。

威力とは裏腹に、滑性も慣性も相殺して拳を埋め込み「く」の字に折れ曲がって停止したドーパントの身体を見下ろしてゼキスは立ち上がり、バツクルのスロットからチャペルメモリを引き抜くとそれをチャペルクロークの左拳が握るグリップの中のスロットに挿し入れた。

《チャペル！マキシマムドライブ！》

強制増幅器によって高速演算を施されたチャペルメモリから倍加したエネルギーが溢れ出し、膨大なエネルギーの流入を受けたチャペルクロークの長大な紡錘形の表面に無数の光線が走るように輝きを放ち始めた。

『……チャペルファルスチャージ……』

左拳を引き絞ったゼキスが呟く。

そして足下でもがくフリクション・ドーパント目掛けて突き出そうとしたその瞬間、横から何か巨大な影が襲いかかってきたのに気付いた。

『白衣！危ねえ！』

遠くからのダブルの声とほぼ同時に、ゼキスの左肩に巨大な牙の列が噛み付いてきた。

『!?!?』

虚を突かれた衝撃から立ち直ったゼキスが見たものは、己の左腕に噛みつく巨大なワニの首から手足を生やした異形の姿だった。

ダメージはない。この巨大ワニが噛み付いているのは選りにも選りてチャペルクロークである。その効果により慣性を中和させており、ワニの牙はゼキスの腕を噛みちぎる方向に力を加えることができない。

『っひつ!? ひいいい!?』

その隙を突いてフリクション・ドーパントが這うように逃げようとする。

『……邪魔をするな』

しつこく噛み続けているワニ型ドーパントに対し押し殺した声で告げたゼキスは、わずかに足の位置を変えるとワニの口から腕を引き抜く勢いのままその場で一回転し、輝く左拳で弧を描くように周囲を一閃した。

『ーーーーっ!?』

虚空に刻まれた左拳の軌跡はまず間近にいたワニ型ドーパントを吹き飛ばし、そしてその直径を爆発的に拡張させると、這々の体で逃げていたフリクション・ドーパントをも貫いて二体纏めて爆発させてしまった。

その輝く光輪は、もしも上から見る者がいたなら「C」の形に見えただろう。

やがてゼキスを中心に炸裂した光の爆発の跡には、ガイアメモリの強制排出に伴う後遺症により目元をどす黒く染めて倒れ伏す見知らぬ男と、真理亜が標的としたフィギュアスケート選手の女。

遅れて、粉々に砕けたガイアメモリの成れの果てが辺りに散らばった。

『……ん！？』

フリクション・ドーパントが撃破されるのを呆然と見ていたダブルの身体から、虹色の力場がガラスの割れるような音を立てて粉々に飛散していった。

『……お、おお！？』

フリクションメモリがブレイクされたことで、滑性フィールドが解除されたのだろう。滑る気配がなくなったことでダブルは恐る恐る身を起こし、足裏がちゃんと接地したことを確認すると慌てて立ち上がった。

『おっしゃあ！ 滑らねえ！』

『翔太郎。まだ、白衣が残っているよ』

脳裏からのフリリップの警告に、喝采をあげた翔太郎は慌ててゼキスの動向に注目し身構えた。

だがゼキスは立ち上がったダブルを見ると、倒れた人間には見向きもせずそこから離れていった。

そして外れたところに乗り捨てられていたゼキス自身のものとおぼしき倒れたバイクに歩み寄ると、そのタンク部分に手をかざした。すると、あるうことかバイクのタンク表面からガイアメモリが抜け出るようにして現れ、そのバイクは輝きに包まれると前後が黒とグリーンに塗り分けられた見覚えのあるバイクに変移してしまった。

『ああっ！？ あいつ、俺のバイクを！？』

『物体を変質できるガイアメモリ？ ……白衣は、そんな物まで…』

喫驚する翔太郎の裏でフリリップが訝しむダブルの見つめる先で、謎のガイアメモリを回収したゼキスは振り返らずに立ち去っていった。

ダブルがここにいる以上、ガイアメモリ使用者の処遇を任せるつも

りなのだろう。

ここに自分たちがいなくなったらどうなっていたのだろうと、翔太郎はふと思いついた恐ろしい想像に僅かに身震いした。

青い自転車を転がす揃いの青いジャケットを羽織った職員たちが慌ただしく出入りする自転車便「シルフィード」本社の搬出口の脇で壁の陰に隠れたその白い細腕が、楕円形の機械に青いガイアメモリを装填して地面に放った。

その機械は複雑かつ迅速に部品を移動させてウサギのような形状に変形すると、まさしくウサギよろしくひょこひょこ跳ねて、従業員出入り口へと向かっていった。

やがてクリップボードを持ち歩く目的の人物の足下に辿り着くと、その機械のウサギは耳の根本の円形のユニットを前に向け、本来はイヤーパーツ部分であるそれを展開変形させると大音響モードへと移行した。

「……あら？」

ようやく足下の機械のウサギに気付いたその少女が、訝しげに見下ろした。

だが、もう遅い。

既にウサギの耳のスピーカーから可聴範囲外の音波が少女に向けて放射されている。

そのまま呆然としたように見下ろしている目の前から機械のウサギが振り向いて立ち去っていつても、少女は同じ姿勢で棒立ちしたままだった。

「ただいまーっす！」

「シルフィード」の従業員出入口に、脳天気な笑顔の鷺生が片手を

上げたすたと歩いてやって来た。

だが、そこにいるあずみは、何も無い地面を見下ろして呆然と棒立ちしたまま反応しない。

「……？ あずみさん？」

訝しんだ驚生は近寄ってあずみの目の前で掌をぱたぱたと振る。

「……！？」

やがて目をしばたかかせてあずみが意識を復帰させた。

「あ！？ え！？ あれ！？」

そして辺りを見回して喫驚している。

「……どしたの？あずみさん。」

「……ああ、いや、ええと……」

混乱した様子のおずみは片手でこめかみを押さえ、眉をしかめるが、やがて手を振って居住まいを正した。

「ん。なんでもない。ちょっと、ぼおっとしただけ。」

「ふうん。そう。」

驚生としても、きょとんと見返すほかない。

「って、それよりも驚生！ あんたまたこんな遅くなって、どこほつつき歩いてたのよ！？」

「いやあ。俺の場合は「ほつつき走る」って言うか」

「どっちでもいいわよっ！？」

へらへらと訂正した驚生の脳天にクリップボードが振り下ろされた。

「もういいから、とつとつ今日の分の報告をまとめてねっ！ すぐ

によっ！」

「はい。」

その返事は、地面に突っ伏す驚生の後頭部から漏れ出てきたが、あずみは一顧だにせずに社屋に入っていつてしまった。

「シンパシーメモリ」を装填されたラビットポッドの強制共感、言い換えれば「催眠音波」により、あずみは「驚生の脚の骨折」の事実も「脚の骨折が復元している」怪現象も、「驚生の自転車がない」

ということにも気付かない。  
異常な事実を認識不能にされたあずみは、そのまま「鷺生の交通事  
故以前から続くいつもの日常」に戻っていった。

まずいことになった……

意識のみの世界の中で、真理亜はひとり、爪を噛む心地で懊悩して  
いた。

鷺生の自転車が、あのハードボイルド気取りの探偵の手に渡ってし  
まった……

鷺生へのあらゆる追跡を回避する為に「フォービドゥンメモリ」の  
力で自分たちの情報の伝播は禁止したが、それは物理的な接触まで  
もを阻害しない。

もし彼らが鷺生の自転車を「シルフィード」に届けに来たら、そこ  
に鷺生が居合わせたらアウトだ。

探偵の介入を受けたら、鷺生の日常が、鷺生が生きる世界が壊れて  
しまう。

それだけではない。

ディセプトメモリとチャペルメモリの使用頻度が増えてきている。  
これは非常に良くないことだ。

とはいえ、真理亜は鷺生に強く出られると否とは言えない。

どうしたら……

意識だけの世界の中で、真理亜はひとり悩み続けていた。

無機質な電子音が、薄暗い簡素な白い部屋に響き渡った。

男は、着信を再三促す白衣のポケットからやかましい携帯電話を取り出して、開く。

「……はい？」

『ふっふ。久し振りだな、井坂。』

「やあ。君ですか。」

髪を短く刈り込んだ男は、無機質な瞳を不快に歪めて応答した。

「金輪際、聞きたくなかった声、ですね。切っていいですか？」

『ふっふ。相変わらずのご挨拶で何よりだ。』

素気無い嫌悪も、この電話の相手にとっては冗談にしか聞こえないのか。

スピーカーから聞こえてくる含み笑いは、まるで目の前に彫りの深い顔を歪めて肩を揺する姿を幻視させるほどに存在感に溢れ印象深い。

この井坂 深紅郎にとっては心底忌々しいことに。

『だが、切るのは話を聞いてからにするがいい。伊達や酔狂でなければ、俺がいま貴様に電話をかけたことが無意味であるはずがない。違うか？』

「伊達や酔狂が服を着て歩いているような君に言われてもねえ。」

『ふっふ。良く言う。貴様の座興こそ酔狂の極みではないか？』

「切っていいですか？」

『「マリアメモリ」を見かけたぞ。』

唐突に差し挟まれた語句に、井坂は息を呑んだ。

『どういうことだろうな、これは。なあ。どういうことなんだろうな。』

「……さあ。」

井坂は、息を呑み下したのどを押さえてようやくそれだけを言った。対して、電話の相手は狂喜の色を増している。

『面白いな。実に面白い。ふっふ。俺はそれを伝えたかったただけだ。じゃあな。』

そして通話は井坂の反応も待たずに一方的に切れてしまった。

だが、井坂は頭の中にあの男の哄笑が残響しているように感じた。

「……………ばかな……………」

椅子の上で呆然とした井坂の呟きが、薄暗い無機質な部屋に漏れ出て消えていった。

t o n e x t   f i l e . . .

## File・02 銀盤を舞うF / 交錯する歪んだ図形（後書き）

仮面ライダー XXまとめ@Wiki

ガイアメモリ

・ダッシュメモリ（D / 緑）

「疾走の記憶」を宿したガイアメモリ。これは変身には使用されず、移動手段生成にのみ使用される。

このメモリは、「車輪がふたつ付いた乗り物」と認識されるあらゆる物体を、ゼクス専用バイク「カームアヴェンジャー」へと変異させる。

お笑い芸人がやってるローション相撲。今回のバトルシーンはアレを思い出して頂けるとその大変さがお分かり頂けるかと思います。

って酷い例えだ。

でも侮れませんローション相撲。転倒してアバラへし折った芸人がいましたね。みなさんも気を付けて下さい。

今回のサブタイトル「銀盤を舞うF」の「F」は、ご想像の通り「フィギュアスケート」の「F」であり、「フリクション（摩擦）」の「F」でもありました。

ちなみに前回の「Dの肖像」は、小説「ドリアン・グレイの肖像」の「D」にして、「ドrow（描画）」の「D」のダブルミーニング。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0933i/>

---

デュオソリスト・キス 仮面ライダーW(ダブル)外伝 仮面ライダーXX(ゼキス)

2011年4月7日01時07分発行